

中部・徳山の民具

Mingu of Chubu District-Tokuyama

脇田雅彦（神野善治）



凡 例

- 1) この表は、『徳山の山村生活用具一概説・目録編』『徳山の山村生活用具一実測図編一』（ともに1987年 徳山村教育委員会発行）をもとに一覧表を作成し、補足として、『揖斐川町の生活用具一手作り民具が語るもの』（2010年 揖斐川町教育委員会編）の中から「使用地 徳山地区」の記載のあるものを加えて作成したものである。
- 2) 本表の分類（掲載順）は『徳山の山村生活用具一概説・目録編』に準じた（下記目次参照）。
- 3) 「名称」欄の民具名は、『国際常民文化研究叢書 6 一民具の名称に関する基礎的研究—[民具名一覧編]』（神奈川大学 国際常民文化研究機構 2014）に記載の名称に揃うよう心がけたが、[民具名一覧編]に記載のなかったものについては便宜上つけるか、空欄のままとした。
- 4) 「説明」欄の文章は、概ね上記参考文献からの引用となっている。
- 5) 「画像ファイル名」欄に記載のあるものは、本叢書 175 ページ以降の画像一覧にまとめて掲載した。
- 6) 「画像ファイル名」について
画像ファイル名は、出典をたどれるように名づけた。「徳 4」は「徳山民俗資料収蔵庫 展示解説」のパンフレットを表し、「P」はその掲載ページである。
例) 徳 4_P2_ 木地_ ショクダイ
→「徳山民俗資料収蔵庫 展示解説」パンフレットの P2「木地屋用品・製品」の項目にある民具名「ショクダイ」を表す（ここでいう民具名は、当該地の呼称）。

目 次

A 山樵用具 ……………p. 159	K 漁撈用具 ……………p. 170
B 木地屋用具・製品 ……………p. 160	L 自然物採取用具 ……………p. 171
C へぎ板打ち・かやぶき用具 ……………p. 161	M 運搬用具 ……………p. 171
D 紙すき用具・製品 ……………p. 161	N 衣生活・食生活用具 ……………p. 172
E 鍛冶屋・大工用具 ……………p. 162	O 出作生活用具 ……………p. 174
F 農具 ……………p. 163	P 計量用具 ……………p. 174
G 養蚕用具 ……………p. 166	Q 信仰・儀礼用具 ……………p. 174
H 紡織用具 ……………p. 166	
I 手仕事用具……………p. 168	画像一覧 ……………p. 175
J 狩猟用具……………p. 170	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
A 山樵用具				
1 杣・木挽き				
(1) 鋸				
横びき鋸	ダイキリ		大切。大型横びき鋸。トチの大材をネギリ（根元から伐採）、さらにこれをタマガル（輪切りにする）ときに用いる。	
	メヌキ		横びき鋸。ダイギリの新しい型。ノコクスを出しやすく改良したもの。	
	ガンド		横びき鋸。対象とする材にあわせハミチの長さを選ぶ。	
	キリオトシ		横びき鋸。細身で、柄とハミチは直線状になる。タマガリ作業の最終に使う。切り離しに効果的。	
	テノコ		手鋸。横びき鋸。サヤを作り、腰につけて持ち歩く。小型のオガミ形式（ハミチと柄が交差する）。	
縦びき鋸	オオガ	オガ、マエビキ、オオノコ	大鋸。縦びき鋸。トチ板など大材の縦びきに用いる。オガ、マエビキ、オオノコともいう。	
(2) 斧				
斧	ヨキ		立木を伐り倒す斧。村内の長屋鍛冶によるものは「く」の字状に屈曲している。	
	キワリヨキ		薪を割るときに使うので、ヨキに比べてずんぐりし、厚い。	
刃掛け	ハガキ		刃掛。ヨキの刃を保護するためにかける。	
鉞	マサカリ		鉞。用材をはつるもので、枕木材の加工にも使った。首の長いものほど新しい製品。	
(3) 鉋				
鉋	サキナタ		刃先にトビがないものをさす。細い枝などを切るときに使う。	
	トビナタ		鳶鉋。刃先にトビと呼ぶ突起を持つハナ付き鉋。サキナタに比べて幅も広い。	
	エダウチ		土佐のもので、柄のつけ方はいわゆる西日本式。炭焼きが利用した。	
鉋鞘	ナタザヤ		ハナのないサキナタを取めるのに使われた。	
鉋籠	ナタカゴ		トビナタを入れて腰にさげるためのネギ細工（板細工）の籠。	
(4) 皮むき鎌				
皮むき鎌	カワムキガマ		乙状をなし、両刃で、伐採したスギヤヒノキの皮むきに用いる。	
	カワムキ		スギヤヒノキの皮を削る。鎌の背側にも刃をつけた型式で、押し・ひく両用型。長柄をつける。	
皮むき	キノカワムキ		木の皮むき。スギヤヒノキの皮を削る。土佐産のものもある。	
(5) 修理用具				
鋸挟み	ノコハサミ	ハサミイタ	目立てをするとき、鋸を挟む板。ハサミイタともいう。	
鑢	ゲンシ		オガ、鋸の歯を調整する。	
	ヤスリ		オガ、ダイギリの目を立てる。	
歯槌	ハヅチ	アタリヅチ、アサリダシ	鋸のアサリを出すときに打つ槌。叩いてアサリを調整する。アタリヅチ、アサリダシともいう。	
砥石	トイシ	アラト、コンゴウト、シアゲト	ナタ、ヨキなどを研ぐのに使用する。アラト、コンゴウト、シアゲトがある。携行するときはビクに入れて腰に下げる。	
	ウスバ		ヨキ・ナタの手入れ用具。地金部分を削って刃を鋭くする。鍛冶センのような形をしている。	
(6) その他				
楔	クサビ		木を伐るときに打ちこんで望みの方向へ倒す。	
	カナヤ		薪を割るときに利用する他、炭焼職でも使う。	
	クチャ	カナヤ	材をひくときに使う小型の楔。カナヤともいう。小さいので紛失しやすいこともあって、紐で結ばれる。	
曲金	サシガネ		トチイタをひくときに、ネジレをみたり厚さを測る。	
墨壺	スミツボ		トチイタをひくとき、スミウチに使う。	
錠	カスガイ		木挽、木馬ひきなどに材木を固定する。	
尻皮	シリカワ		山仕事のとき尻の下に敷く。	
2 段木流し 移動・運送用具				
(1) 段木流し用具				
刻印	コックイ		段木（だんぼく）を共同で川流しするときに、家印の部分に墨をつけ自分の段木に打ち込んだ。段木とは大垣藩における製材用語で「つだ」ともい、薪となるものを指す。切り倒したぶなどの雑木を2尺2寸（約70cm）に切ったもので、この段木を割って薪とした。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
鳶口	トビ		段木を流送する際、材を押ししたり、引き寄せたりして流れにのせるために使う。県内益田郡小坂町の後藤鍛冶のものは評判がよく「小坂かぎ」と呼ばれた。柄の先端にケンと呼ぶ突起をつけたものもある。	
	ヤス		沈んだ材を拾い上げるのに利用する槍状の用具。沈んだ木を突いて上げる。流送する材を突き押ししたり、引き上げるのに使う。	
(2) 移動・運送用具				
鳶口	オオトビ	トビ	大鳶。陸上で材を移動させるときに使う大きなトビ。山中での材の搬出に使用。	
	トビ		鳶。陸上で材を移動させるときに使う小さいトビ。山中での材の搬出に使用。	
	ドットコ		材をこじて少しずつ移動させる用具。鳶類に以て材を動かす。丸太材を移動するときを使う。ドットコは通常の鳶口とは刃の向きが異なる。	
角回し	カクマワシ	ガンタ	材を回転させながら移動させる用具。ガンタともいう。	
鶴嘴	ツル		鶴嘴。丸太材をこじて移動するのに用いる。材の下につっこみ、マクラをかってからそれを支点にしてこじて移動させる。土木工事に使う鶴嘴（西洋伝来）とは形が異なる。	
	コヅル		小鶴。ツル同様、材の下につっこみ、マクラをかって支点にし、こじて移動させる。	
検尺	ケンシャク		搬出された丸太材の石数を見積る用具。つもった材積は記帳して業者に渡される。	
木馬	キンマ		用材搬出に使用する。縄はヒキヅチ、カタカケヅナ、カタヅナ、ヒキヅチなど。	
環	マンリキ		環のついたマンリキは、材のトオキン（材の切り口側）に打ち、環部に綱を通して材を引き出す。ガンブチともいう。	
櫓	ソリ		雪中、用材などの搬出に使う。第二次大戦後に利用されるようになった。1本ゾリのシンボゾリと、2本ゾリがある。	
胸当	ムネアテ		材をかかえるとき、胸当てとして着用する。	
3 炭焼き用具				
尖り鋏	トギリクワ		炭ガマを作るときの土を掘る。	
鉢打槌	ハチウチヅチ		炭焼用のカマを築くときにハチを打つ。	
炭切鋸	スミキリノコ		カマから出した炭を切る。ガンドともいう。	
炭俵	スミゴモ		炭菰。出荷するとき炭を詰める俵。	
針	ハリ		炭俵の口を縫ってとじる。	
吊り鉤	ショタイカギ		重さを測るとき吊りさげる。炭俵の目方をはかるとき鉤として使う。	
滑車	カッシャ		炭焼の炭俵や薪を運ぶ鉄索に使う。	
手鉤	テカギ		炭・米などの俵を扱うときに使う。	
4 造林用具				
木鎌	キガマ	バガマ、オオガマ	キガマは固い草や灌木などを刈るもので、バガマ、オオガマともいう。キガマ、ツルクビの鎌類は、ナタと併用し、まずチゴシラエから始まる。	
下刈鎌	ツルクビ		鶴首。柄は短い、下刈鎌で、草刈鎌としても使う。	
	シタカリガマ		造林の際の下刈鎌。刃はふつうの三日月型と、ツルクビの2種類があり、柄は長い。	
杉木おこし	スギノココシ		滑車のついた綱。積雪のため、倒れた杉の木を起こすのに使う。通常は2個のカッシャを用い、起こした木は縄でクイに固定する。	
5 しいたけ作り用具・その他				
椎茸打ち	ウチヌキ	シイタケウチツチ、シイタケウチ	打貫。シイタケ栽培のため、ホダギに菌を植える穴をあけるために使う。鉄製の円筒状で、片側は刃状をなしている。シイタケウチツチ、シイタケウチともいう。	
漆掻鎌	ウルシカキ		ウルシをかく鎌。	
B 木地屋用具・製品				
1 木地ひき用具				
横びき鋸	リョオギリ		2人びきの横びき鋸。材のタマガリに使い、両端に把手を通し2人びきする。	
轆轤	ロクロ		木地ひきの足踏みろくろ。	
2 木地製品				
木地鉢	キジバチ	ハチ	だんご、そばをねる。食物を入れる。ハチともいう。	
荒木地	アラキジ	アラゴキ	ゴキの半製品。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
膳	ゼン		食事のとき、めいめいの食器をおく。	
盆	ボン		食器類をのせて運んだり、少量の穀物入れに使ったり、お茶汲のボンとして利用。	
鉢	コバチ		食物を盛って出す小鉢。	
	ハチ		食物を盛る。	
御器	オゴキ		御仏飯を盛る。	
茶杓	チャブシャク		茶を汲み出すときに使う。	
盃台	サカズキダイ		僧侶などの接待のとき、盃や食物を入れておいた。高杯型。	
菓子鉢	カシバチ		来客用の茶菓を盛る。	
飯櫃	オヒツ		御櫃。僧侶などの接待のとき、ご飯をこれに入れる。	
湯呑台	オチャダイ		中央に穴が空いており、客の接待のとき、穴に湯呑みを入れて運ぶ。	
小皿	コザラ		食物の容器。	
燭台	ショクダイ		カンテラやろうそくを立てる台。対して、めいめいが手作りしたものを「ロオソクタテ」という。	徳4_P2_木地_ショクダイ
紵台	ハリダイ	クケダイ	針台。針山を受ける棒にL字形に台をつけた裁縫道具。布端を引っ張るのに用いる。	徳4_P2_木地_クケダイ
針箱	アマダイ		引き出し付きのお針用具入れ。以前はハリカゴが使われていたが、アマダイにとって代わった。	
枕	タテマクラ	キジマクラ、マクラ	立枕。寝るときの枕。キジマクラ、マクラともいう。	徳4_P2_木地_タテマクラ 徳4_P6_木工製品_タテマクラ

C ヘギ板打ち・かやぶき用具

1 ヘギ板打ち用具

大割鉋	オオワリナタ	ツカナタ	樽(クレ。板屋根をふくための薄い板)を作る際、原材をオオワリするナタでツチと併用する。ツカナタともいう。	
樽割鉋	クレヘギナタ	イタワリガマ、ヘギガマ、クレガマ、ナタ	樽をへぐときに使う。材を二つ二つに割ってゆくために少し小型に作られている。	徳4_P2_屋根作り_クレヘギナタ
槌	ツチ		樽を割るナタやへぐカマを叩く。ナタを打つために側面が凹んでしまう。	
金槌	カナヅチ		ヘギイタ打ちの用具。センマイ(樽板)をふくときは小型のカナヅチで釘を打ち込む。そのため、叩き面は広く作られている。	
剥板	ヘギイタ	センマイイタ	樽板(センマイ)葺屋根の板材に使う。センマイイタともいう。	

2 かやぶき用具

針	ハリ	ヤ、タケバリ	屋根のタルキにカヤを縛るノイナワを通すときに用いる。強く縛りつけるため、カケヤで叩く。	徳4_P2_屋根作り_ハリ
縫縄	スイナワ		屋根に利用される縄。	
掛矢	カケヤ	ガンコ	カヤをタルキに縛りつけるときに叩きしめる。ガンコともいう。	
手槌	テヅチ	ツチ、テイタ	ふきあげたあと、軒端をそろえるために利用する。棒の先が板状になっていて、葺いたカヤの下場をそろえたり、スイナワのしめつけに使う。ツチ、テイタともいう。	
屋根鉋	ヤネバサミ		カヤ屋根の仕上げに表面を切りそろえる。	徳4_P2_屋根作り_ヤネバサミ
茅差	カヤサシ		棒の先が尖った板(ヘラ)状になっていて、腐った部分の補修など、カヤ屋根の修理に使う。	

D 紙すき用具・製品

1 紙すき用具

大釜	オオガマ		カミの材料の楮を蒸す釜。	
蒸し桶	ムシオケ		オオガマにいたれた楮の木の上にこれを覆いかぶせて楮を蒸す。	
削り台	オタクリイタ		蒸して皮をむき川で洗った楮をオタクリイタの上におき、オタクリガネで上皮をこすりとりしてから干し上げる。	
削り包丁	オイタクリガネ		上皮をこすり取るための道具。	
すくい棒	マタブリ		楮を煮るときに使う二股の木。煮上がった材料をすくいあげる道具。	徳4_P3_紙すき_マタブリ
灰汁垂れ	アクタレ	オッパ、ホッパ	煮上がった楮のアク汁を切る樋(とい)状の板。オッパ、ホッパともいう。木の空洞になった一部を使う。	徳4_P3_紙すき_オッパ(アクタレ)
紙桶	カミオケ		カミシボリ工程で用いる。叩き砕いたカミの原料を取納、カミシボリゴヤに運ぶ。角桶型で紐をつけ、必要分のカミを運ぶ。	
笊	シヨオケ		カミの原料からシブ(付着物)を取るときに使う。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
紙叩き槌	カミタタキツチ	ツチ、コヅチ、カミタタキバイ、バイ	カミタタキイシにのせた材料を叩く。二人向き合い両手のツチで叩く。ツチ、コヅチ、カミタタキバイ、バイともいう。	徳4_P3_紙すき_カミタタキツチ
紙叩き台	カミタタキイシ		カミの繊維をツチで叩きこなすための台。砂岩等の円板状。カミタタキツチと併用。	徳4_P3_紙すき_カミタタキイシ
紙漉槽	フネ	カミスキブネ	カミの原料にネリを加え、カミを漉くときに使うフネ。カミスキブネともいう。	徳4_P3_紙すき_フネ
まんが	マグワ		方把フネの中の原料をかき混ぜる。農具のマグワ（馬鞆）に似て櫛状になっているが、木製。	
攪拌棒	カミスキボオ	マゼボウ	棒状の紙ませ。フネの中のカミを混ぜる棒。昔はマグワ（方把）で攪拌していたが、次第に一本棒のカミスキボウ（マゼボウ）にとって代わった。	
漉箕	ス		カミを漉きあげる箕。	
漉桁	コテ		スを挟みこむ枠。フネからカミを漉きあげるスをはさむ。	
竹竿	ユミ	スタテワク	弓。すいたあと上のコテをもたせかける道具。竹などでP字型にしたもの。スをたてかけるものはスタテワクという。	
渡し棒	ワタシボオ		フネに棧状にさし渡し、コテからスはずす間、フネの上で下のコテを支える。	
箕編台	アミダイ		カミ漉きに必要の箕を編む台。	
水切板	タネイタ		漉いた紙を積み重ねる長方形の厚手の板。押えとしても利用する。漉いたカミを積み重ね、水切りのためもう一枚のタネイタをのせて重しとする。	
菅	スゲ		漉いたカミの間に挟む。	徳4_P3_紙すき_スゲ
干板	カミイタ	ハリイタ	漉いたカミを張り付け乾燥させる張り板。カツラ材。四枚ばりで台と併用する。	
台	ダイ		カミイタを支える台。細長く高い机状の台。	
刷毛	スイゴホオキ	ミゴホオキ	みご箒。スイゴを束ねたもので、カミイタに張ったカミのシワを取る用具。	
裁板	カミキリイタ		紙切板。自家用の障子に張るとき、カミを切ってそろえる台。	
2 製品				
紙	カミ		漉きあげた紙。48枚を一帖とし、ミノガミと呼ぶ。ゴミの混じる黒いものはシブガミといいハナガミとした。	
E 鍛冶屋・大工用具				
1 鍛冶屋用具				
鞆	フイゴ		フドに風を送る用具。	徳4_P3_鍛冶_フイゴ
かなくそ取り	トコボリ		ミミカキ状で、ヒゲチやホドにたまるカナクソを取る。	
炭かき	マリカキ		炭かき。ホドの炭を扱う。	
火鉗	ハサミ		鋏。挟んでおく道具。コバサミ、ヒラバサミの他、ヒツ用、カマ用など専用のハサミもある。	
小槌	コヅチ		ナタ、カマなどのハガネをわかしづける、細かいものを打つ、眼釘の穴をあける、などに使う。	
均槌	ナラシツチ		オオツチのあとを均してゆく。	
当て槌	アテコ	ヘシコヅチ、タガネ	角を整えたり、切断する用具。切截などに用いるタガネ、角つけに用いるヘシコ、溝づくりに用いるアテコ、アカメタときのカスを取るアカトリなど。	
当て金	アテコ	ガンブチ、ブチヌキ、ドウガネマワシ	角形、丸形の穴あけの用具。ヨキのヒツなど角型の穴をあけるアテコ、ガンブチ、ヨキのヒツなど丸柄の穴作りに使うブチヌキ、ナタ、カマなどのドンガネ（環）作りに使うドウガネマワシなど。	
金床	アテカナトコ		鉄床。ヨキなどの角型・丸型のヒツを修理する。	
銃	セン		鉄材を削ったり、ヨキ・ナタを削ったりする。	
	ツラヌキ	ヒコオキセン	ヒコオキセンともいい、十字状になっている。ナタの刃を鋭く削る。	
鉄筋曲	テッキンマゲ		鉄棒を曲げる台。	
刻印	コクイン		鍛冶屋の刻印。	
2 大工道具				
鋸	ドオヅキ		精密な細工をする。	
	ガガリ		特殊な鋸。小さい穴あけなどに用いる。	
	ヒキマワシ		特殊な鋸。曲線をひきだすときに使う。	

名 称	徳山での主な呼称	その他呼称	説 明	画像ファイル名
目出	メダシ	メダテツチ	へら状に刻み面をもつ道具で、鋸の歯の調整に利用。アサリを出したり、調節したりするのに使う。	
罫引	ケヒキ		筋ひきを使う。薄い板材をひき割る。	
鉋	カンナ		材を削る。用途によって、ナガダイ、ワキガンナ、ワキトリガンナ、ウスクリ、ミゾツキガンナなどの種類がある。	
	ナガダイ		長い材を削るときに使う。	
	ワキガンナ		材の横面を削る。	
	ワキトリガンナ		材の横面を削り凹状の段を作る。	
	ウスクリ		白などの局面を削って仕上げ上げる。	
	ミゾツキガンナ	ミゾツキ	ミゾを削る。	
	ミゾガンナ		ガラスやベニヤ板などをはめこむミゾを削る。	
ヨコガンナ		ミゾを削るときやその横面を削る。		
台均し鉋	ダイナオシ		小型の鉋で、大切な鉋の台の平面を保つための用具。これによって削りあとの良否がきめられる。	
叩き鑿	ノミ		叩いて穴を彫る。刃の大きさによってイチブノミ、ニブノミ、サンブノミ、ヨンブノミ等に区別される。	
突き鑿	ツキノミ	シアゲノミ、マルノミ	穴鑿。アナホリの仕上げについて使う。シアゲノミ、マルノミともいう。	
錐	キリ		穴をあける道具。	
槌	ツチ		釘を打つ。	
切出小刀	キリダシ		小細工仕事に利用する。	
F 農具				
1 水田作用具				
(1) 水田造成用具				
股鋤	ガリ		石拾い用具。二股の鋤状で、水田を築く際、川の中の石を拾い上げる。	
水系	ミズイト		田の土手や石垣作りのとき、水平をみるのに使う。	
箕	タケミ		竹箕。土やゴミなどを運ぶ。	
敷土打	シキウチ		新田作りにシキツチを固める。木製。	
(2) 耕作用具				
備中鋤	ヨツグワ・ミツグワ		四つ鋤・三つ鋤。水田のタオコシ（あら起こし）に使う。古くはミツグワを利用してしたが、昭和10年ごろからヨツグワが普及し始めた。いずれも畑用のものより刃幅が広いのを特色とする。	
下駄備中	タオコシ		水田のタオコシ（あら起こし）に使う。	
犁	スキ	ゴウシュウズキ、カラスキ	水田のタオコシ（あら起こし）に牛にひかせる。ゴウシュウズキは自然木の曲りを利用した長床型で、近江からの導入と伝えている。	徳4_P4_農具_カラスキ
農耕鞍	クラ		スキやマグワをひかせるとき、牛の背につける。双橋鞍。	
胸懸	ムナガイ		牛にクラをつけるときに首とクラとをフクロアミの縄でつなぐ。	
尻枷	シリガセボウ		スキを牛にひかせるとき、スキと牛のクラとの間に取り付ける。	
押切	オシギリ		牛のカイバにするワラなどを裁断する。	
飼葉桶	カイバオケ		牛のカイバなどを入れる桶。	
(3) 代掻用具				
畔叩き	アゼタタキ		田のアゼをアゼヌリ前に叩く槌。槌部分に垂直に柄がある。	
黒鋤	アゼヌリクワ	オオグワ、タグワ、アゼヌリグワ、メグワ	畦塗り鋤。苗代、本田のアゼヌリをする。古い型は風呂鋤で、昭和初期ごろから全鉄製のものに代わり始めた。オオグワ、タグワ、アゼヌリグワ、メグワともいう。	
馬鋤	マグワ		タオコシのあと、牛にひかせてシロ作りをする。	
人力馬鋤	ウシ	ウシメ、ゴロゴロ	牛の代わりに人力でひくマグワ。ウシ、ウシメとよぶ。牛を持たない家で使用した。	徳4_P4_農具_ウシメ
碎土機	サイドキ		新しい型のマグワで、「松井式碎土機」。	
柄振	エブリ		杓。マグワをかけたあと、田面の凹凸を押し均す。	
(4) 苗代・田植用具				
苗代鍬	ナラシイタ		均し板。苗代の田面を均し、糶まき後おさえる。	
種籾鎮圧機	ゴマ		糶まき後、籾種をおさえる金網を張った車。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
油紙	アブラガミ		保温折衷苗代に使う。	
杭	クイ		種まきの後保温のために、苗代の上面に張った油紙を押える。	
田植縄	タウエナワ	シヨロナワ	正条植え用具。田植えのとき田面に張り、植える位置を示す。シヨロナワともいう。	
筋付け	スジツケ		苗を植えるとき、田面をひいてスジをつけ、植える位置を示す。等間隔に突起があり、柄がある。昭和30～40年ごろ導入。	
田植枠	ワク		苗を植えるとき、田面をころがし、植える位置をきめる。六角形。枠(回転枠)の利用は極めて少なかった。	
苗籠	ナエトリカゴ		苗取籠。苗代から本田へ稲苗を運ぶ。	
(5) 灌漑用具・肥培用具				
鋤簾	ジョオレン		土砂扱い用で、マワシ(水を温めるために迂回させた流れ溝)や堰水に溜った土や石を掘り上げる。古型は竹編み部分を持ち、やがて全部が鉄製になった。	
	ガメ		第二次大戦後にツルのないガメに変わった。	
田舟	ツチブネ	フネ	土舟。マワシ(畦に沿って作った溝)に溜った土石をジョオレンなどでかき出し、盛って運ぶ。田植えのときの苗配り、堆肥扱いにも重宝した。	徳4_P4_農具_ツチブネ
レンゲ刈り鎌	レンゲガリガマ		田に作ったレンゲを刈るときに使う。	
(6) 除草用具				
田掻き	クサトリ	ゴロゴロ、クルマ、クサトリキ	草取り。田圃の苗間をこすって草を取る。ゴロゴロ、クルマ、クサトリキともいう。古型は回転式でない鉄のツメを打っただけのもだったが、大正中～昭和初期ごろ回転式除草機が現れた。	
培土機	ツチヨセ		土寄せ。培土植の田に用い、土を株元に寄せる。	
(7) 収穫用具				
鋸鎌	ノコギリガマ	タカリガマ、イネカリガマ	稲刈り専用の鎌。タカリガマともいう。一般に普及したのは大正～昭和初期。	
稲刈機	イネカリキ		田の中を押して行き、稲を挟み刈る。	
(8) 脱穀用具				
千歯扱	イナコキ	コイバシ	稲扱。稲の穂をこき落す。コイバシともいう。	
足踏み脱穀機	イナコキ	ダッコッキ	足踏み脱穀機。ダッコッキともいう。	
(9) 調整用具				
通し	フジトオシ		藤通し。イナコキにかけたイネやヒエなどの穀類、豆類などを選別する。ツツラフジを網材とする。	
箕	ミ	フジミ	穀類や豆類をシャクシャクしたり(ひる)運ぶ。フジミともいう。	
唐箕	トオミ		関西型。脱穀したイネ・ヒエ・アワ・豆などの穀類を風選して、シイナ、少し悪い、良質などに分ける。	
芒落とし	モミケブシ		毛稲(ノギの長い稲)叩き。ノギを叩いて落とす。ツチ型。	
搗き臼	タチウス		立臼。ケイネのノギオトシや、米の精白、餅搗きなどに用いる。	徳4_P6_割りもの_タチウス
木搗臼	ズリウス		靱搗りに使う臼で、木製。石素材の挽き臼同様、上臼と下臼のふたつに分かれる形状。靱搗り作業はサンギにとりつく人と、ウスの際に立つネドリとも呼ばれる人で行われる。	
土搗臼	トウス		靱搗り用の土臼。土臼をひく大きな把手をサンギという。	
	キカイウス		改良土臼。靱搗りの土臼の小型のもの。昭和10年ごろより流行し、軽くて喜ばれた。土臼をひく大きな把手をヤリギという。	
万石通し	センゴク		千石通し。ひいた米を精選し、靱と選別する。	
唐臼	カラウス		米などの精白に使う足踏み式の道具。水力を利用したものはミズガラウス(水唐臼)という。	
通し	コメドオシ	モミドオシ	米通し。米と靱の選別に使う。カラウスで精白した米をぬかと選別する。	
	コゴメドオシ	トオシ	小米通し。精白した米をぬかと選別する。トオシともいう。	
米差し	コメサン		米俵に差し込み、少量の米を取り出して調べるときに使う。	
2 畑作用具				
(1) 耕作用具				
備中鋤	ミツグワ		三つ鋤。畑打ち、ウネアゲに使う。水田用のものよりも刃が細身。ヒツの突出する型が古く、時代が下るにつれ、ヒツ部は刃部に陥入する。	
	フタツグワ		二つ鋤。雪の消えた後の畑や固い地を打つのに使う。	
平鋤	ヒラグワ	ハタウチグワ、メグワ	風呂のついた鋤で、畑うち、種まきの際の土かけ、ウネアゲに使う。ヤキハタ、ヤマハタでも使う。ハタウチグワ、メグワともいう。	

名 称	徳山での主な呼称	その他呼称	説 明	画像ファイル名
尖り鍬	トギリグワ	オザキ、オグワ	先の尖った鍬で、石の多い畑の深打ち、ウネアゲに使う。オザキ、オグワともいう。トギリグワのカラ部（風呂鍬の台・柄）をクワガラという。	
土佐鍬	トサグワ		風呂のない鍬で、畑打ち、ウネアゲ、土かけに使う。昭和10年ごろからの導入で、土佐産の小型で軽い製品である。	
唐鍬	トグワ	トオグワ、トングワ	開墾などに固い地面や根株を掘る。トオグワ、トングワともいう。ヤキハタ、ヤマハタにも使う。石畑打ちに使う刃先のとがったものはピッチェウ、チョンピグワとよぶ。	
片鶴	カタヅル	バチヅル、トオヅル	開墾などに固い地面や根株、石を掘る。	
両鶴	リョウヅル		開墾などに固い地面を打つ、石を掘り起こす。両端が尖る。	
種入れ	タネヅツ		種筒。種子を保存するための道具。本体はなんでもない筒状になっていて、一方には底がはめこまれ、一方に栓をする。	
	オッポ		種子を保存するための道具。オヒツ保存のイズメとよく似た形状。	
手鍬	チョッカイコ	コチョビ	豆植えの小鍬。草取り、豆植えなどの小仕事をするのに使う。コチョビともいう。	
穴突き棒	アナツキボウ		豆植え・稗移植用の棒。	
鍬	ワサビグワ		ワサビを栽培するときの耕作に使う。	
(2) 肥培管理用具				
熊手	クマデ		長い柄の先に、爪が3~4本ついた形状。とった草やゴミをかき集める。	
フォーク	ホーク		ホシクサや堆肥などを扱う。	
肥柄杓	コエジャク		肥柄杓。	
肥樽	コエダル	シヨンベオケ	人糞尿を山畑に背負って運ぶ桶。鏡板が張られているかどうかで区別され、鏡板があるものはコエダル、コエダシと呼ばれ、鏡板のないものはシヨンベオケという。	
天秤棒	ザルポオ		肩担い棒。	
草刈鎌	クサカリガマ	サヨリガマ、ショオエモンガマ	草刈り鎌。薄刃のものはサヨリガマ、少し厚手になるとクサカリガマと呼び、いずれも越前産が多い。厚刃のものはショオエモンガマともいう。	
鎌掛け	カマカケ		トグチなどに打ち付け、カマを掛ける。	
蚊火	カビ		草刈りのとき、フト・蚊などの虫除けにいぶす。木綿布や古ワラジ、ムシロなどで作る。	
(3) 収穫用具				
鎌	ホトリガマ		穂刈鎌。アワ・ヒエなどのホモノ類の穂切り専用の鎌。	
(4) 調整用具				
乾燥箱	アブリコ		ホモノ類の穂を乾燥させる道具。ケヤキの皮で作り、いろりの上（アマの下）に吊るして、粟・稗などの穂を乾燥させる。伝統的な樹皮を使った円筒形のものから、板材を使った角型のものへと推移していった。新しいものではスにカナアミを使用している。	徳4_P4_加工_アブリコ
叩き棒	バイ	イヤキボウ	ホモノ類の穂を叩く道具。穀類・豆類を叩いて脱粒させる。イヤキボウともいう。自然木の反りを巧みに利用している。揖斐川地区では、同じ役目の「ヨコツチ」が使われるようになった。（ツチ部分に長い柄が差し込んである）	徳4_P4_加工_バイ
扱管	マメコキ		脱粒に用いる道具。一端を尖らせた二本の竹の、もう一端を紐で結びとめた形状。	
搗き臼	カチウス		ヨコギネを併用し、アワ・ヒエなどの穀類を搗いて脱穀する。ウスの中で最大で、寸胴形。タマゴ状に深く彫り上げられており、搗いた物が外に飛び出さないよう、内側に反りがある。	徳4_P4_加工_カチウス
杵	キネ	モチツキキネ	穀類を搗く。モチツキキネともいう。	
挽臼	ヒキウス		各種の穀類を粉にするときに使う石臼。越前のものは砂岩で、ひき手は石臼本体につっこむ。対して美濃臼は、花崗岩製で臼にまいたタガにひき手を差し込む。	
通し	ヒエゴドオシ	アラドオシ	稗粉通し。粉にひいたヒエや大豆粉を選別する。アラドオシともいう。	
	チュウトオシ		中通し。石臼でひいたヒエ・豆の粉の選別に使う。中程度に細かい。	
	キヌドオシ	スイノ	絹通し。ソバキリの粉、米の粉などの選別に使う。細かい。スイノともいう。	
	カネドオシ	アラドオシ	金通し。脱穀した穀類や豆類の選別用具。古いものは麻網、そのガワも縄で構成する。	
目立槌	メタテツチ	メトリ	減った石臼のメをたてるときに使う。メトリともいう。	
(5) 収納用具				
米櫃	ドウヌキ		胴抜き。トチやキリ材をくりぬいたえぐり胴の容器で、底は桶屋に依頼して作る。調整された穀類を貯蔵する。	徳4_P4_貯蔵_ドウヌキ
吠	カマス		穀類の搬出、収納用具。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
(6) 加工用具				
杵	テギネ	タテギネ、リョオギネ	堅杵。もっぱら味噌豆や豆腐豆を搗くのに使われた。タテギネ、リョオギネともいう。両杵・片杵あり、穀類の脱粒調製精白にも用いていた。	徳4_P4_加工_タテギネ片杵型 徳4_P4_加工_タテギネ両杵型
挽臼	ヒキウス		豆腐用のヒキウス。石臼。粉引き用に比べると薄く作られる。	
	チャウス		茶臼。抹茶の加工に利用。	
薄刃	ウスバ		煙草の葉をきざむとき使う。	
G 養蚕用具				
1 桑切用具				
桑切り包丁	クワキリボオチョウ		蚕に与える桑の葉を切る包丁。	
桑切板	クワキリバン		桑の葉を切るときに使う板。浅い箱型。	
2 育成用具				
蚕箸	カイコバシ		ヒトクラ（1眠）からフタクラ（2眠）にかけての幼令期に、場所を変えてやるときに使う。ハキタテばかりの蚕を移す時にも使う。	
養蚕火鉢	カイコヒバチ	オカイコヒバチ	蚕火鉢。ハルコを飼う季節に保温用として使う。オカイコヒバチともいう。	
蚕筵	ヨオザンムシロ	ムシロ	養蚕筵。ヨオザンカゴの上に敷いて蚕をかう。ムシロともいう。	
蚕籠	コブタ	ヨオザンカゴ	蚕を飼う筵をのせる枠。ヨオザンカゴともいう。	
蚕網	カイコアミ	イアミ、ブンリアミ、イトアミ	ムシロを替えるときカイコにかぶせる網。各令に応じたものを使う。イアミ、ブンリアミ、イトアミなど。	
編み台	ユアミ		五齡期に用いるユアミ（イアミ・イグサの網）を編む台。	
給桑台	ダイ		ムシロをかえるときに、コブタをのせる台。	
3 上簇用具				
折糞機	オリワラキ		上簇に使うオリワラを作る。	
簇織機	マブシオリキ		上簇に使うマブシ（昭和初年から使用）を作る。	
4 収繭、処理用具				
毛羽取機	ワタトリキ	ワタトリ	綿取機。繭についている糸屑を取る。ワタトリともいう。大正末期ごろから導入。	徳4_P3_養蚕_ワタトリキ
5 鑑札				
組合鑑札	クミアイカンサツ		組合員鑑札。	
H 紡織用具				
1 製糸用具				
(1) イラソ（イラクサ）、ヤマン（カラムシ）、アサ				
麻の葉落し	アサノハオトシ		麻の葉をこぎ落とす道具。竹を斜めに切ったもの。	
苧引台・苧引鋸	タクリイタ・タクリガネ	オタクリイタ・オタクリガネ、オタクリダイ・ガネ	手繰板・手繰刃。楮や麻の表皮をたくるときにの板と刃。オタクリイタ・オタクリガネ、オタクリダイ・ガネともいう。タクリガネは小さな板状の鉄片で、タクリイタの上でゴシカワ（オクソ）を取る。	
播混棒	カキマゼボオ		アサを煮るときにかきまぜ用に使う。	
苧桶	オンボケ		アサやイラクサなどのうんだ糸をいれる。古型はカンバの皮で、底は紙をはり合わせて作られている。	徳4_P5_紡織_オンボケ
紡ぎ車	ブンブン	ビービー	糸によりをかけたり、クダに糸を巻き取るとき使う。ビービーともいう。	
紡錘（車）	ツモ	ツム	績。糸車を使い、糸によりをかける。ツムともいう。	
	テマワシツモ		手回し績。手で回転させて糸によりをかけたり、糸を数本組んだりする。ブンブン（紡ぎ車）のない家で使った。また、各種に編み糸作りにも長い間利用されてきた。	徳4_P5_紡織_テマワシツモ
	ツモマワシ		テマワシツモを回転させる。刻み目をつけた板におき、片方の手でそれを持って、その軸部を強く押さえてツモを回転させる。	
弁慶	ツモサシ		績差。ワラツト状の保存具。上から吊るし、ツモを刺して保管した。魚の串など食べ物専用のもののほか、日常の失いやすい小道具などの保管用などもあった。ワラツト、ツモサシ、ツモサシツトなどともいう。	
枷	カセ		枠。経糸にするためのカセを作る。	徳4_P5_紡織_カセワク
繰車	オオカセ		大枠。イトマキに移しかえるときに使う。水平に回転する。	
糸枠台	ウシクビ		牛首。経糸にするための糸をオオカセからイトマキに移し替える。	
糸枠	イトマキ		経糸などをもつれないよう巻き、とっておくワク。	
綜割	ワクトリ		枠とり。カセカケにかけた糸を経糸をヘル前段階としてイトワクに巻き取るときに使う。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
総車	カセトリ		袴取。シマダにしてある糸カセを使いやすいようにイトマキに移し替えるとき使う。イトワクにあげた糸をカセにするとき使う。	
経台	ヘダイ		必要な長さ分の経糸をとるために使う。	徳4_P5_紡織_ヘダイ
管	クダ		ヒの中に入れる緯糸を巻き取る。	
糸掛	イトカケ		テマワシツモなどで糸を2~3本あわせるときに使う。鉤状。	
(2) 絹				
座繰	ザクリ		繭から糸をひき出すときに使う。古くはザクリ、のちにはダルマと呼ぶ足踏み用具に至る。	
足踏式糸取機	ダルマ		足踏製糸機。繭から糸を引き出すときに使う。個人の家にも備え、糸をカセにして近江・越前の商人へ売り出していた。	
糸枠	イトマキ	イトワク	繭から引き出した糸を巻き取る。イトワクともいう。	
揚枠	オオワク		大枠。イトマキの糸をいったんオオワクにあげてからカセにした。6角型で一度に10個前後のイトマキを処理できた。	
2 機械用具				
地機	ハタゴ		アサやイラクサの糸を布を織るときに使う。形式はいわゆる西日本型。	
	チキリ		膝。経糸を巻き取る。	
	ハタクサ		経糸をチキリに巻き込むとき、糸の間にはさみこむ棒。	
	アサリボオ		経糸の上下糸を分け、交叉させる。	
中枠	ナカワク		上糸と下糸の間をあげ、ヒが通り易いようにする枠。	
押え棒	オサエボオ		上下の糸を押える棒。	
綾竹	アヤダケ		カザリイトをかけ、シタイトを引き上げる。	
箴	オサ		経糸を通し糸がもつれないようにする。	
箴枠	オサヅカ	オサワク	オサを両側からはさみ固定するために使う。	
管大杼	ヒ		経糸を通したあと、それをうちこむ。	
巻棒	マキボオ		チマキボオを固定するとき使い、布地を巻き取る。	
腰皮	コシカワ	オビカワ、コシアテ	腰に回しマキボオを結んで経糸を引っ張る。オビカワ、コシアテともいう。ケヤキの皮が使われる。	
3 製品・原料				
(1) イラクサ (イラクサ) 製品				
長着	ナガギ		自家織した着物。	
布袋	ヌノブクロ		穀類の収納・運搬に使う。天井から吊り下げていた。	
	ノノブクロ		小物入れの袋。	
	トウフシポリ		豆腐をしぼる布。穀類も入れる。	
	シブコシフクロ		柿渋をこす布。	
風呂敷 (平包)	ヌイズ	ヌノズ	縫い合わせた布。何かを包んで保管する風呂敷代わりはもちろん、桑の葉にかぶせたり、トチノミのコザワシ加工、大豆搾りの袋など様々な使い方があった。	
敷き布	シキヌノ		セイロの敷布として使う。	
手拭い	ユテ		湯手拭い。風呂専用の手拭い。	
	アセトリ		仕事中の汗拭き。	
布	ノノ		イラクサの反物。	
(2) ヤマソ (カラムシ) 製品				
布袋	ノノブクロ		穀類の収納・搬出に使う。	
(3) アカソ製品				
手拭い	ユテ		湯手拭い。風呂専用の手拭い。	
(4) アサ製品				
布袋	ヌノブクロ	ノノブクロ、フクロ	穀類などいろいろなものを入れる。ノノブクロ、フクロともいう。	
	チャブクロ		茶袋。茶の葉を入れ、茶釜で煮出す袋。	
風呂敷	ヌノズ		縫い合わせた布。	
布	ノノ		アサの反物。染めてジンバイやカタビラを作る。	
(5) 原料				
イラクサ	イラクサ		原材料。表皮をとって乾燥させたもの。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
カラムシ	ヤマソ		原材料。表皮をとって乾燥させたもの。	
麻	アサ		原材料。土用の頃採取。蒸して皮をむき乾燥させたもの。	
I 手仕事用具				
1 わら仕事用具・製品				
(1) 草履作り、わら細工用具・製品				
藁打槌	ヨコゾチ	ツチ、ワラタタキツチ、ワラウチツチ	横槌。ワラ細工のときワラを叩く。ツチ、ワラタタキツチ、ワラウチツチともいう。	
藁選り	ワラスグリ		ワラ細工のときワラの屑を取り除く。	
草鞋編み台	ゾオリダイ	ゾウリツクルダイ、ゾウリアミダイ、ゾオリツクリノキカイ、ゾオリツクリ、ゾウリアミ	草履台。草履を作るとき芯縄をかける。大垣近郊より導入されたもの。	
鼻緒通し	ハナオガエシ		ワラ草履などのハナオをあげるときに使うハリ。竹製。	
草履	ゾウリ	ジョリ、ジョオリ、ナガジョリ、ゾオリ	仕事、ふだん履き。ジョリ、ジョオリ、ナガジョリともいう。	
藁沓	ワラグツ	ツノグツ、ホクボグツ	積雪期近所への出歩きにはく。ツノグツ、ホクボグツともいう。	徳4_P6_手仕事_ワラグツ
鍋敷	ナベシキワ		ナベをおろすとき下に敷く。	
鍋掴み	ナベツカミ	ナベトリ	鍋取り。煮物をしたナベをおろすとき使う。	
嬰兒籠	イズミ	ユズミ	藁の保育具。嬰兒を入れておく。ユズミともいう。	
猫つぐら	ネコイズミ		猫のイズミ。	
お櫃入れ	ボンボン	イズミ、ユズミ	ヒツに入れた御飯の保温に使う。搗いた餅が低温でシミモチになるのを防ぐ役割も兼ねる。	徳4_P6_手仕事_ボンボン
(2) むしろ・かます・藁製作用具・製品				
筵機	ムシロバタゴ	ハタゴ	筵織機。ハタゴともいう。筵縄を通す、箆の代りをする用具をコテ、緯糸にあたる縄を差し込む用具をイ、ヤ、サス、筵縄を本体に固定する用具をハリボオという。	徳4_P6_手仕事_ムシロバタゴ
	コテ		ムシロバタの付属用具。徳山ではコテと呼ぶが、オサという地域も多い。ムシロバタにかけたムシロナワの前後を入れ替える役割を持つ。	
	ヤ・イ・サス・ヒ		ムシロバタの付属用具。コテで開いたムシロナワの間にワラを通す役割を持つ。	
	ツチ		ムシロバタの付属用具。支柱にクサビを打ちこみ、ムシロナワの張り具合を調節する役割を持つ。	
縄絢機	ナワナイキ	ナワナイキカイ	製縄機。手で順次ワラを入れ、足踏みで回転させて縄を絢う。ナワナイキカイともいう。	
吹針	カマスバリ		カマスを縫い上げるときのハリ。	
筵	ムシロ		穀類、豆類の脱穀、乾燥などに使う。	
縄	ナワ		柴を束ねるときなどに使う。	
	ツルベナワ	イドナワ	井戸縄。ツルベをとりつける縄。	
(3) 炭俵・袋物・はばき編用具・原料				
俵編み	アミダイ	マタ、ウマ、ハタゴ	炭ごもを編む台。マタ、ウマ、ハタゴともいう。	
編み台	アミダイ	ハタゴ	炭ごもやタス(大きい袋)、タステンゴ、テンゴ(背負い袋)、ハンパキなどを編む台。ハタゴともいう。	
重し	ツチノコ	ツチラコ、トットロコ	炭ごも、タス、テンゴなどを編むときの重し。ツチラコ、トットロコなどという。	
蒲	ガマ		ハンパキなどを編む素材。	
2 板細工用具・製品				
鉋	ナタ	サキナタ	材を割るときに使う。サキナタ。	
小刀	キリダシ		細工仕事に使う小刀。	
押さえ	オサエ		ネギ(カエデ類やナラなどを素材とする籠編み)の籠を編むとき使う締具。	
桑籠	クワカゴ		繭や桑の葉をいれて運ぶ板細工の籠。ツケカゴが一杯になると、このクワカゴ(コザ)に移す。できた繭を地区外へ運ぶ用具でもあった。	徳4_P6_板細工_コザ
腰籠	ツケカゴ	クワトリカゴ、カンゴ、ゴショオカゴ、カゴ、コカゴ	付籠。桑の葉や、アワ・ヒエなどの取り入れに使う腰提用の籠。クワトリカゴ、カンゴ、ゴショオカゴ、カゴ、コカゴともいう。	徳4_P6_板細工_ツケカゴ
	コシツケ	ヨンゴ	腰に付けて、収穫物や小道具を入れる籠。ヨンゴともいう。	
苧うみ籠	オウミカゴ		麻績み籠。績んだオを入れる板細工の籠。	徳4_P5_紡織_オウミカゴ

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
芋洗い籠	フンゴ		踏籠。里芋の皮をむくときなど、台所で使う板細工の籠。里芋を入れ足を踏み込んで皮を剥いたり、洗い物に使う。	
笊	コジョオケ		陶器のハチもの、サラもの代用として、昔は芋類などのめいめいの盛り分けにも重宝されてきた。古い食生活用具の名残りに位置づけられる貴重なもの。少量のゆでものの水切りにも重宝された。小さい意味の接頭語のないまま、ただシヨオケともいう。市販の紙すき用シヨオケと間違いかねないのに要注意。素材にはネギと称される木本のほとんどを網羅し、ミズナラからカエデ系、マタタビも利用。	徳4_P6_板細工_コジョオケ
小籠	ココゴ		小物入れの他、洗い物の水切りなどにも使う板細工の籠。	
針籠	ハリカゴ		裁縫用具などを入れる小物入れ。素材のネギ（カエデ類やナラなどを素材とする籠編み）の幅がびっちり締めてこまれており、紙を張った籠ではない。その後、「アマダイ」（引き出し付きのお針用具入れ）に座を譲った。	徳4_P6_板細工_ハリカゴ
賽銭籠	オサイセンカゴ		道場で喜捨を求めて人の中を歩くとき用いる。	
3 削物用具・製品				
臼割り	ウスクリ		タチウス、ヌキドウなど、材をほりこむときに使う。	
鉢	オオバチ		大鉢。大型の割り鉢。中に石臼を入れてひいたり、粉をふるるとき使う。平野部では足付きの台で粉ひきをしていた。	
	ハチ(中)		中鉢。粉食の加工、ミソ玉作りなどに使う。	徳4_P6_割りもの_手彫りのハチ
	ハチ(小)		粉食の加工や、食物の入れものに使う。	徳4_P2_木地_ハチもの
	コバチ		小鉢。食物を盛るとき使う。	
俎	キリバン		食物の調理に使う。溝つきで長円型が古く、次いで角型に移りやがて脚部をもつにいたる。切るものに水気があったり、切る時に散らかっても、周りを囲む溝があるため、ユルエ（囲炉裏）の周囲を汚すことがない。	徳4_P6_割りもの_キリバン
搗き臼	タチウス	ゲンゲ	もち搗きに使う臼をタチウス、ゲンゲという（調整用のものはカチウス）。ウス本体の下部に大きなくびれを持っているのが特徴。	
塩槽	シオブネ		塩吠のニガリを受ける用具。2本の横木を渡し、その上に塩吠を置く。クリ材が使われた。	徳4_P6_割りもの_シオブネ
杓文字	オオジャクシ	カマジャクシ、シャクシ、ミソマメノシャクシ	大杓子。オオガマの御飯をよそうときや味噌豆をあえるとき使う。カマジャクシ、シャクシ、ミソマメノシャクシともいう。	
	シャクシ(小)		ナベやヒツから御飯をよそうとき使う。	
汁杓子	シルジャクシ	シルジャク	汁物をすくう。団子を煮てすくい出したり、水切りも兼ねる。	
滑車	イドグルマ	クルマ	井戸滑車。ツルベ用の滑車。クルマともいう。	
4 木の皮細工、製品・原料				
鍋敷	ナベシキ		炊き上がったナベを床の上におくときに敷く。	
素材	カンバ		カンバザクラの樹皮でテングなどを作る。	
	シナ		シナノキの樹皮。アクぬきをして乾燥させ、ワラ細工などあみもののひもに使う。	
5 木工用具・製品				
(1) 木工用具				
鋸	ノコ	タテビキノコ、ドオヅキ、ガガリ、ハッスンノコ、キュウスンノコ	材をひくときに使う。タテビキノコ、ドオヅキ、ガガリ、ハッスンノコ、キュウスンノコともいう。	
手斧	チョンナ		材をはつて、鉋のかけ易いようにするために使う。	
丸鉋	マルガンナ		曲線面を削るとき使う。	
鉋	ワキガンナ		材の横の面を削る。	
	メントリ		材のメンをとる。	
砥石	トイシ		刃物類の手入れに使う。(カード)	
鑿	セン		桶類の材を削るのに使う。	
ボルト錐	ギムネ		ボルト錐。先が螺旋状で木材の穴あけに使う。	
錐	キリ		材に穴をあけるときに使う。	
槌	ツチ	トチンコ、サイクツチ、コツチ	家のまわりの小仕事などの叩き用具に使う。トチンコ、サイクツチ、コツチともいう。	
釘箱	クギバコ	クギイレ	釘を収納しておく箱。クギイレともいう。	
釘抜き	クギヌキ		釘を抜きとるとき使う。	
竹割	タケワリ		竹細工のとき竹を割る。両手で持って複数本に割る。	
	ドオガネマワシ		柄の座金作り。柄のとりつけの環を叩き出すときに使う。	

名 称	徳山での主な呼称	その他呼称	説 明	画像ファイル名
鉋	ハサミ	ヤキバサミ、コバサミ	オガなどのハヤキをするときに使うヤキバサミ、サキガケをするとき刃部をはさむコバサミがある。	
鑿	ボオヤスリ		棒鑿。	
錐	アナトオシ	ヤキトオシ	木製品の穴あけに使う。	
焼印	ヤキバン		所有する用具に、家の焼印をつける。	
(2) 木工製品				
床箱	ネヤ		1~2人の寝られるだけの枠を作り、その中にワラを敷いて寝床にする。いわゆるハコドコ。	徳4_P6_木工製品_ネヤ
枕	キマクラ		木枕。枕として利用する。鼓型と角型をみる。	
雪掻	テコ	テッコ、ナガデコ、コデコ、ユキスベ	屋根の雪をおろすときに使う。テッコ、ナガデコ、コデコ、ユキスベともいう。	
菜箸	サイバシ		山菜をゆでたり、煮物をあえるときに使う。	
火吹竹	ヒフキダケ		イロリの火を吹く。	
豆腐箱	トオフバコ		豆腐を作るとき使う。	
広蓋	コプタ		お飾りに使う餅を入れる箱。	
岡持	オコビツ	オコバコ、ベッコオバコ	御講箱。講に詣でるとき、ご飯を入れて持ち歩く。オコバコ、ベッコオバコともいう。	徳4_P8_信仰・儀礼_オコビツ
御仏飯箱	オブッパンバコ	オブッキバコ、ゴゼンビツ	オブッパンを入れて運ぶ。	
櫓	ソリ		雪ソリ。子どもの遊具。	
6 紙細工・製品				
渋紙	シブガミ		石臼の下、畳じきの上に敷いた。	
紙貼り籠	ハリボンボ		トオシの悪くなったものに和紙を貼り重ね、丈夫さを増すために柿渋を塗ったり、こわれた籠などに和紙を貼り重ね、柿渋を塗り、食物などの容器にしたもの。かつてはどこの家にもあった。	
型紙	ガンガミ		棺用の型紙。葬式の時に棺桶などを飾る。	
J 狩猟用具				
1 わな猟用具				
槍	クマヤリ		古い猟法であるオセ（押し）の際、使用した。オセとは通り道に多数の石をのせた枝組を仕掛け、圧死させる罠。	徳4_P5_狩猟_クマヤリ
虎挟み	ハサミ	クマバサミ	罠。片バネ、両バネなどの種類があり、アルプス印が多くみられる。大小さまざまで、熊とり用のものは鉄部に鋭い歯をもつ。イタチを対象とするものには竹筒利用のものがある。	徳4_P5_狩猟_ハサミ
罠	モグラトリ		もぐらをとる罠で、通路穴に仕掛ける。	
	ネズミトリ		ねずみをとるための罠。	
2 落とし穴猟用具				
槍	シシヤリ	ヤリ	猪槍。穴に落ちた猪を仕止めるときに使う。ヤリともいう。	徳4_P5_狩猟_シシヤリ
3 鉄砲猟用具				
鉄砲	ヒナワジュウ		火縄銃。鳥獣とくにクマ・カモシカを撃つ。	
	ムラタジュウ		村田銃。銃の主力。銃身が長く単発ではあるが命中率が高いので好まれた。鳥獣とくにクマ・カモシカを撃つ。	
銃弾	ホンダマ		鉄砲の弾。	
	サンダン		散弾。	
玉作り	イガタ		弾の鋳型として利用する。	
	ナマリダマ		鉄砲の弾の原料の鉛。	
	カンコミ		薬莖の内部に火薬、弾をつめこむ道具。	
弾入れ	ダントイ		弾帯。鉄砲の弾を入れて腰につけ、狩猟にでる。	
銃身掃除	ジュウシンソジ		鉄砲の銃身を掃除する道具。	
4 クマノイ作り用具				
熊の胆型	ホシバコ		干箱。熊の胆を干す道具。小箱の底が棧になっている。	
K 漁撈用具				
1 釣漁用具				
釣針	オコヅリバリ		置釣りの針。	
たも網	アヌカケタモ		鮎採袋。釣った鮎を受けたり、オトリを入れておく木綿布袋。	

名 称	徳山での主な呼称	その他呼称	説 明	画像ファイル名
2 突漁用具				
銚	ヤス		魚を突くときに使う。ハコカガミと併用してアマゴなどを突く。	
箱眼鏡	ハコカガミ	ミズカガミ、ミズクグリ、ハコメガネ	ヤスやシャクリで魚をとるとき、水中をのぞくために使う。ミズカガミ、ミズクグリ、ハコメガネともいう。大正年間ごろには使われていた。	
3 筌漁用具				
筌	モジ	ゴモジ	ウナギやアカザスをとる。漏斗部をノドという。	
	タテモジ		笹竹を編みつけ、ノドなしはクダリモジ、ノドつきはノボリモジとして使う大型のもの。	
	クダリモジ		下筌。産卵期のアマゴをとる。口を上流に向けて仕掛ける。	徳4_P5_漁撈_クダリモジ
4 根流し漁用具				
たも網	ホオリ		すくい網。浮いた魚をすくう。	
5 網漁用具				
手網	テエナ		手網。追込漁に使う。	
投網	トアミ		網を投げ拡げて魚をとる。	
たも網	ホオリ		大きな丸型のすくい網。ニゴリズキ。川の濁ったときに岸辺に集まったアユ・アマゴをすくう。柄のない小型のホオリは、ネナガシ（樹皮利用）のときなどその両縁をもって魚を拾う。	
網針	アミスキバリ		網梳針。網を自作したり、破れたときの補修に利用する。	
6 生簀・収納				
生簀	イケタゴ		生簀籠。釣りあげた鮎とオトリを入れる。ブリキ、真鍮製。	
魚籠	ウナギカゴ	イオトリカゴ、ノワイカゴ、ノッベ、コシツケ、ヨゴ	竹製。とれた魚を入れておく。イオトリカゴ、ノワイカゴ、ノッベ、コシツケ、ヨゴともいう。	
	ビク		腰付け籠。とれた魚を入れ、腰につけて持ち歩く。ビク。口をすぼめたもの、頸部を細くしたものなどいろいろ。ネギ細工（カエデ類やナラなどが素材）のものもある。	
L 自然物採取用具				
1 トチの実拾い・トチの実加工用具				
(1) トチの実拾い				
背負い袋	スズカリ		編み袋。拾ったトチの実を運ぶ専用の袋。クビカケ（背負縄）と併用される。	徳4_P7_自然物採取_スズカリ
(2) トチの実の調理用具				
栃剥き	トチムキ	トチネジ、ネジ、ネジキ、グリグリ	トチのみの皮むきに利用する。大正～昭和10年にかけての普及。トチネジ、ネジ、ネジキ、グリグリともいう。それ以前は歯でむいていた。	
籠	アジカ		マタタビの籠。トチのみのでんぷん加工専用。コザワシのとき、粉と皮を選別する。胴部を2段階に編み分けるなど手がこんでいる。	徳4_P7_自然物採取_アジカ
蒸籠	ムシオケ	セイロ、セイロオケ	蒸桶。トチのミなど食料を蒸す。セイロ、セイロオケともいう。底に穴が1つあり、そこへネコと呼ぶ小さな穴を一面にあげた蓋を置く。カクセイロが登場してからも、少量の蒸しものに重宝された。なお、ムシオケ系、カクセイロ系にも属さない蒸籠がもう一種あり、「ムシキ」とある。円筒形（曲げ物）に2本の棧木が差し込まれている。	徳4_P7_自然物採取_セイロ 徳4_P7_自然物採取_セイロ（底）
カクセイロ	カクセイロ		ムシオケの後に登場。井桁状の木枠を4～5段に積み上げる方式。下段から順次上の枠へと蒸し上がり、効率がよい。	
股木	マタブリ	マゼボウ	二股の木の枝。ワラビ、ゼンマイなどの加工の際、かきまわすために利用する。マゼボウともいう。また、マタブリと一緒に用いる「カギンコ」という、茹であがったものをかき寄せる鉤型の混ぜ棒がある。	
2 山芋掘り用具				
掘り棒	ヤマイモホリ		山芋掘りのカギ形の棒。トグワ類で土をよけたあと、イモの周りをていねいに掘り下げた。	
3 油しぼり用具				
油締め	アブラシボリ		灯油代わりにもなるイヌガヤの実の油を絞る。袋の中に実を詰め、クサビを打ちこんだり、テコの原理で圧搾したりする。	
M 運搬用具				
1 背負運搬用具				
(1) クビカケ（背負い縄）				
背負い縄	クビカケ	クビナワ、オйнаワ	背負縄。エチゴジョイ（越後背負）方式。オйнаワともいう。シナ皮などを混ぜ、胸前へくる中央部分を広く編む。	徳4_P7_運搬_クビカケ
	クミナワ		セタ（背負梯子）の肩縄のような背負い法をとる二本縄方式も僅かに残されている。肩縄の長いものを二本用意し、その頂部をセビ、セビツナなどと呼ぶ別の縄で結びつけた形式。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
(2) セナカミノ				
背中当て	セナカミノ	セナアナ、コミノ、ニタレ	背中蓑。背中当てとして、背負縄と併用される。三つ編みひもを用いる。セナアテ、コミノ、ニタレともいう。	徳4_P7_運搬_セナカミノ
	ベッコウミノ		ネゴ編みで作る藁の背中当て。使用は少ない。	
(3) 背負い袋				
背負い袋	タス	タス	大型の背負袋。縄編み。収穫物など大量に運び出すときに使う。背負いのひもはつけず、クビカケ(背負縄)と併用する。タス、ナワともいう。	
	テンゴ	ワラテンゴ、ダステンゴ	背負袋。タスよりも小型で背負ひもをつけ、小道具を入れて運ぶ。ワラテンゴ、ダステンゴともいう。山仕事のとき、弁当のほか、必要な小道具を入れるだけでなく、大形のビクを畳みこむのにも重宝していた。ときにはセタ(背負梯子)と併用することもあった。	徳4_P7_運搬_テンゴ
(4) ヒョットコ				
	ヒョットコ		ドーナツ状の輪をもつ石運び専用。セナカミノと併用して背負う。	
(5) セタ・オイナワ				
背負い梯子	セタ		背板。背負い運搬に使う。ほとんどが無爪式で有爪は極めて少ない。オイヒモ(肩掛けの縄)へ手を通して背負う。	
	コボセタ	コボセタ、マタセタ	セタのうち股木を利用した逆Y字形の背負梯子をコボセタ、コボセタ、マタセタという。	
肩掛け縄	オイナワ	マオイ、オイヒモ、セビ	肩掛け縄。セタにとりつける。	
(6) ニヅエ、(7) マイカゴ、(8) メカゴ				
息杖	ニヅエ	ネヅエ	荷杖。セタで物を運ぶときの杖。休む時に支えとする。	
背負籠	マイカゴ	タケカゴ	繭籠。大型の竹製の籠で、網代編み。繭や桑の葉を入れて運ぶ。タケカゴともいう。	
	メカゴ		目籠。草や繭などを運ぶ背負籠。	
	コザ	コウザ、クワカゴ、マイカゴ	ツケカゴに摘んだ桑の葉を移して運んだり、マユを地区外に運び出す際の運搬具などに用いられた。	
2 肩担い運搬用具				
天秤棒	モッコボウ		畚棒。モッコを肩担いするときに使う。	
畚	モッコ		モッコボウと併用して、土などを運ぶ。	
3 腰下げ運搬用具				
腰籠	ビク		腰提げ袋。収穫物や小道具をいれ腰にさげる。	
	タケカゴ	コシヅケ、タケヨンゴ、ヨンゴ、カゴ	腰付け籠。収穫物や小物を入れ腰に下げる竹籠。	
4 車				
地車	クルマ		いわゆる地車のこと。土、石など短い距離を運ぶとき使う。	
大八車	ドタクルマ	ワ	鉄の輪をはめた大八車で、荷車として使用。ワともいう。	
5 その他				
櫓	カイ		筏流しのカイ。古家の材を運ぶときに使用。	
縄	アサナワ		麻縄。非常時に、仏壇を運び出すために用意された縄。	
N 衣生活・食生活用具				
1 着物				
(1) 男物上着、(2) 男物下着、(3) 男物肌着				
仕事着			男性の仕事着は2部式をとる。かつての上着は女性用のヤマギに近いものだったが、大正年代ごろよりシャツに代わった。	
シャツ	シャツ		山仕事などのとき上着とする。	
法被	ハッピー		仕事のとき上に着る。	
胸当	エドハラマキ		山仕事に珍重された。仕事のとき胸に当てる。法被と併用。	
袖無	デンチ		寒い時期、冬の仕事に欠かせない袖無の上着。男女とも多用した。	
半纏	ハンテン		ワラ細工など屋内の小仕事のとき上に着る。	
綿入れ	ハンテン		綿入れ伴天。冬期の防寒着として、ヤマギやナカギの上に着用する。	
	チャンチャンコ		袖の短い綿入れの上着。以前、山仕事に着用したという。	
帯	スゴキ		男物のオビで、ヤマギの上に2回りでしめる。木綿製。	
山袴	タツキ		仕事のときに着用する。	
	カルサン		仕事のときに着用する。	
股引	モモヒキ		仕事又は遠出のときにはく。タツキやカルサンよりも優位にたつようになった。	

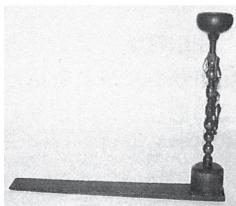
名 称	徳山での主な呼称	その他呼称	説 明	画像ファイル名
ズボン	ズボン		仕事着として着用する。	
褌	エッチェウフンドシ		越中褌。仕事着の下に着用する。	
(4) 女物上着、(5) 女物下着、(6) 女物肌着				
仕事着	ヤマギ(長)		山着。女物上着。仕事のときに着る。ほぼ大正末年ごろまでは1部式だったため、丈が長い。	徳4_P7_衣_ヤマギ
	ヤマギ(短)		山着。2部式になって丈が短くなった。仕事のときモンベと併用する。	
袖無	デンチ		寒い時期、冬の仕事に欠かせない袖無の上着。男女とも多用した。	
半纏	ハンテン		軽い仕事のとき上着の上に着る。	
帯	ヤマオビ		山帯。ヤマギの上からしめる。古くなった裂織の家用を使う。	
手甲	テッコ		仕事の折、甲にはめコハゼでとめて保護具とする。	
前掛け	マエカケ		2幅をふつうとするが、戸入では3幅を利用していた。	
山袴	カルサン		モンベの前に流行した下衣。ほどなくもんべにその座を譲った。	
	モンベ		仕事のときに着用する下衣。	徳4_P7_衣_モンベ
脛巾	ハンバキ		1部式のヤマギのときに併用していた。	
肌襦袢	ジュバン		肌襦袢。仕事着の下に着用する。	
腰巻	フンドシ		腰巻。仕事着の下に着用する。	
腰紐	コシヒモ		腰紐。ヤマギの上にしめる。	
2 かぶりもの				
板笠	イタガサ		雨よけ、日よけ。仕事をするとき頭にかぶる。	
編み笠	アミガサ		佐渡おけさの踊りに使われる形式。円形に編んだ本体を、中央から折り込むため、外観は半月状。イグサを用いた。主に晴天用。	
菅笠	スゲガサ		表面をスゲ、骨組みを竹材で構成。円錐形のもの、頂部が少し平らな富士山形と呼ぶ二つの形式がある。	
竹皮笠	タケノコガサ	ロッパガサ	筍の皮を主に、骨組みにも竹材を用いた。谷汲地区ではロッパガサとも。	
頭巾	ズキン		雪降りるときに頭にかぶる。	
3 はきもの				
足半	アシナカ		田畑ゆき、川仕事にも利用する。	
草鞋	ワラジ	チワランジ、ワランジ、チワラジ	山仕事などに履く。二乳型は少なく、ふつうは四乳。チワランジ、ワランジ、チワラジともいう。	
	ゴンゾウワラジ	ゴンズワラジ	無乳草履。山仕事などに履く。横緒をへりに通す。ゴンズワラジともいう。	
草履	ジョオリ	ゾオリ、ゾリ、ジョリ	男女ともに、家回りはむろんのこと、田畑のゆききに用いた。女性の場合は町へ出かけるときにも履いた。ジョオリは一日から一日半が限界といわれ、雨天には一日に二足は必要だったという。	
下駄	ゾオリゲタ	イタゾオリ	雪が固くしまった時期に使用。底にすべり止めをつけた歯のない下駄。イタゾオリ。	
藁沓	シソクイソック		雪中の履物として欠かせない、ハバキ、コオカケ、ワラジ、ワラグツの四種の機能を持つとされる。一見ワラグツと似ているが、筒状部分が前で割れ、合わせ目に行きの侵入を防ぐ舌状部分が付属する。	
雪草鞋	ユキワラジ	ユキワランジ	シャクナミと併用して雪中の歩行に履く。ハナオ部分はシャクナミをとめ押えるため突出する特色がある。ユキワランジともいう。	徳4_P7_衣_ユキワランジ (シャクナミ付き)
爪掛	ツマカケ	ツカガケ、ツمامキ、ツمامギ、ハナモジ	山仕事の足ごしらえに使われ、毎日使い捨てにされた。ツカガケ、ツمامキ、ツمامギ、ハナモジなどの名称もある。	
	マタ	ツマカケ、ツマグツ、クツタビ、マメグツ、ツマカケ、サナクミ、ワラグツ	指股があり、素足にマタを履き、草鞋を着装した。西美濃地域では、ツマカケ、ツマグツ、クツタビ、越美山地沿いはマメグツ、北美濃周辺は、ツマカケ、サナクミ、ワラグツなどという。	
	シャナクミ	シャナクメ、シャネコメ、サナクミ、ウソ、ウソッペ、ボォズ	山仕事など雪中の歩行用として爪先に履く。用途はマタと同じだが、先が丸く、指股がない。シャナクメ、シャネコメ、サナクミ、ウソ、ウソッペ、ボォズなど多くの呼称がある。	
踵掛	キビスマキ		冬期の足ごしらえに用いた。ハンバキをつけてから、踵から足首へかけてキビスマキを着装。爪先にサナクミを被せ、ユキワラジのヨコナワをくぐり、ハナオの先端部に身つチャックするように、ウシロカケと紐で調節した。	
甲掛	コオカケ		山仕事などのとき足の甲を保護する。	
脛巾	ハンバキ		山仕事の折に脛にまく。材はガマ。	
	ハンバキ		山仕事のとき脛を保護する。材は木綿。	

名称	徳山での主な呼称	その他呼称	説明	画像ファイル名
輪標	カンジキ	ウシカワ	雪中の山行きするとき、ユキワラジの下につける。全体に反りが強く、爪のないのを古型とする。素材は前クロモジ、後ヤマボウシに決められ、ひもには牛皮が好まれた。爪つきのものは昭和30年ごろから使われ始めた。ウシカワともいう。	徳4_P7_衣_カンジキ
鉄標	ガンリキ		山仕事に行くのに雪など凍りついた所でユキワラジの下につける。鉄製。爪は3~4本をふつうとする。	
4 みの・着ござ				
蓑	ミノ		雨降り時の農作業に着る。ワラのヌイゴ部分で作ったものもあり、袖部と腰回り部がない形式をもっている。肩部の文様は地区によって明確に異なる。	
着莫産	キゴザ		田仕事などの、日除けに用いる。	
5 めんば、6 ツト、7 たばこ入れ				
めんば	メンバ	マルメンバ	曲物弁当入れ。山仕事などの御飯入れ容器。信州・福島町産のものが使われている。	
苞	ツト		御飯をいれてメンバ代りにする。越前の畳表を購入して自作した。	
煙草入れ	ドオラン	インロウ、カマス	印籠類。きざみ煙草入れとさせると火打用具。	
O 出作生活用具				
飯炊き鍋	ゴブツパンナベ		御仏飯鍋。仏前に供えるブツパンをたく。	
茶釜	チャマガ		茶釜。茶をわかす。	
五徳	カナゴ	カナワ	五徳（大）。ユルエの中で、煮炊きするとき、ナベを回転する。カナワともいう。	
膳	ゼン		食事用品一式。食事のときの膳。	
背負樽	オネオケ		背負桶。飲用水を背負って運ぶためのもの。鏡板と栓がある。	徳4_P8_出作生活_オネオケ
燭台	ロオソクタテ		ろうそく立て。木地屋が作った製品は「ショクダイ」と呼ぶ	
行灯	アンド		ろうそくやカンテラを入れる燭台。	徳4_P8_出作生活_アンド
カンテラ	ガストウ		瓦斯燈。カンテラを入れる。	
	コトボシ		夜間の外出に使う、石油カンテラ。	
仏壇	ブツダン		出作小屋で祀られていた。	徳4_P8_出作生活_ブツダン
P 計量用具				
1 枺				
枺	マス		穀類や豆類などを計る。イットマス、イチゴウマス、ニゴウマス、ヨンゴウマス、ゴゴウマス、イッシュウマス、イットマスなどの種類がある。	
斗搔	トカキ		マスに入れた穀類を平らにする。	
2 はかり				
竿秤	サオバカリ		採集物、生産物などを計る。各家にあるわけではなく、必要ときに借り回った。	
Q 信仰・儀礼用具				
面	メン		雨乞い祈願のとき、面洗いといって川に流す。	徳4_P1_雨乞いの面 徳4_P8_信仰・儀礼_メン

B 木地屋用具・製品



徳4_P2_木地_シヨクダイ
かやぶき用具



徳4_P2_木地_クゲダイ



徳4_P2_木地_タテマクラ



徳4_P6_木工製品_タテマクラ

C へぎ板打ち・かやぶき用具



徳4_P2_屋根作り_クレヘギナタ

かやぶき用具



徳4_P2_屋根作り_ハリ



徳4_P2_屋根作り_ヤネバサミ



徳4_P3_紙すき_マタプリ



徳4_P3_紙すき_オッパ(アクトレ)

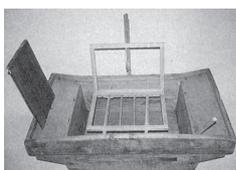


徳4_P3_紙すき_カミタキツタ

D 紙すき用具・製品



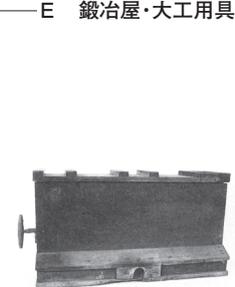
徳4_P3_紙すき_カミタキキシ



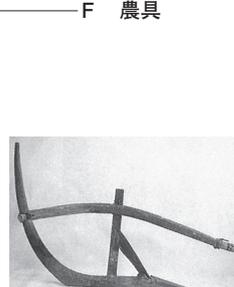
徳4_P3_紙すき_フネ



徳4_P3_紙すき_スゲ

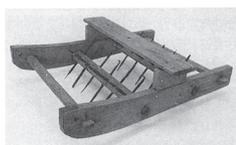


徳4_P3_鍛冶屋_フイゴ



徳4_P4_農具_カラスキ

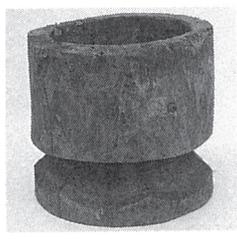
E 鍛冶屋・大工用具



徳4_P4_農具_ウシメ



徳4_P4_農具_ツチブネ



徳4_P6_割りもの_タチウス



徳4_P4_加工_アブリコ



徳4_P4_加工_バイ

F 農具



徳4_P4_加工_カチウス



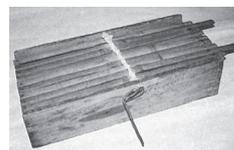
徳4_P4_貯蔵_ドウスキ



徳4_P4_加工_タテギネ片型



徳4_P4_加工_タテギネ両片型

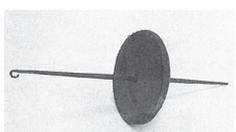


徳4_P3_養蚕_ワタトリキ

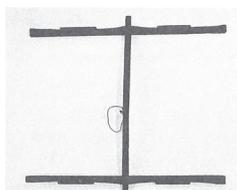
H 紡織用具



徳4_P5_紡織_オンボケ



徳4_P5_紡織_テマワシモ



徳4_P5_紡織_カセワク



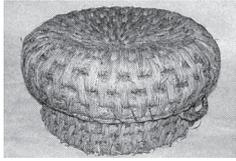
徳4_P5_紡織_ヘダイ

G 養蚕用具

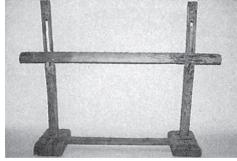


徳4_P6_手仕事_ウラグツ

I 手仕事用具



徳4_P6_手仕事_ボンボン



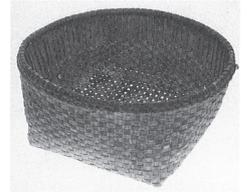
徳4_P6_手仕事_ムシロバタゴ



徳4_P6_板細工_コザ



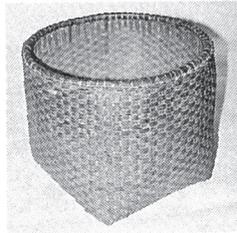
徳4_P6_板細工_ツケカゴ



徳4_P5_紡織_オウミカゴ



徳4_P6_板細工_コジョオケ



徳4_P6_板細工_ハリカゴ



徳4_P6_削りもの_手彫りのハチ

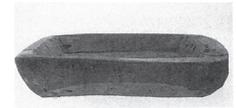


徳4_P2_木地_ハチもの

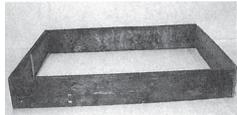


徳4_P6_削りもの_キリバン

J 狩猟用具



徳4_P6_削りもの_シオブネ



徳4_P6_木工製品_ネヤ



徳4_P8_信仰・儀礼_オコビツ



徳4_P5_狩猟_クマヤリ



徳4_P5_狩猟_ハサミ

K 漁撈用具

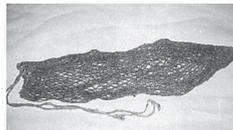


徳4_P5_狩猟_シヤリ

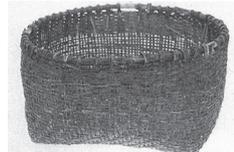


徳4_P5_漁撈_クダリモジ

L 自然物採取用具



徳4_P7_自然物採取_スズカリ



徳4_P7_自然物採取_アジカ



徳4_P7_自然物採取_セイロ

M 運搬用具



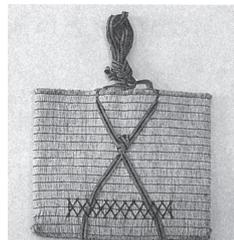
徳4_P7_自然物採取_セイロ(底)



徳4_P7_運搬_クビカケ



徳4_P7_運搬_セナカミノ



徳4_P7_運搬_テング

N 衣・食生活用具

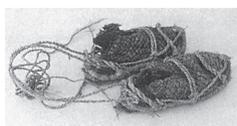


徳4_P7_衣_ヤマギ

O 出作生活用具



徳4_P7_衣_モンベ



徳4_P7_衣_ユキワランジ(シャナクミ付き)



徳4_P7_衣_カンジキ



徳4_P8_出作生活_オネオケ



徳4_P8_出作生活_アンド

Q 信仰・儀礼用具



徳4_P8_出作生活_ブツダン



徳4_P1_雨乞いの面



徳4_P8_信仰・儀礼_メン

徳山の民具

脇田雅彦 (神野善治)

1. 解説

徳山村は、岐阜県の西北隅、福井・滋賀両県境に位置していた奥深い山村である。集落の下からは縄文時代の住居址が発見されて、原始古代の昔から同じ場所にムラが営まれてきたことが想像される。昭和に入ってから山村の暮しが色濃く継承されていたため、民俗学上、早くから注目されていた。1935 (昭和 10) 年に柳田国男が行った民俗調査地点の一つに数えられていたほか、1951 (昭和 26) 年には民俗学者桜田勝徳の『美濃徳山村民俗誌』も出版されている。

1987 (昭和 62) 年、徳山ダム建設のため、藤橋村 (現・揖斐川町) に編入合併され、終村となったが、廃村を間近に迎えた 1985 (昭和 60) 年、「何とか徳山村を記録するものを残さねばならない」という声が高まり、村をあげて民具収集を開始。多くの人々の熱意と努力に支えられ、徳山村が消える間際に、5,890 点にのぼる「徳山の山村生活用具」が国の重要有形民俗文化財に指定された。その内訳は、山樵用具 924 点、木地屋用具・製品 201 点、へぎ板打ち・かやぶき用具 65 点、紙すき用具・製品 308 点、鍛冶屋・大工用具 108 点、農具 1,138 点、養蚕用具 460 点、紡織用 422 点、手仕事用具・製品 1,005 点、狩猟用具 62 点、漁撈用具 74 点、自然物採取用具 91 点、運搬用具 403 点、衣生活・食生活用具 578 点、出作生活用具 21 点、計量用具 26 点、信仰・儀礼用具 4 点である。

これらの資料は山村生活用具としては国内最大規模であり、現在は岐阜県揖斐郡揖斐川町の「徳山民俗資料収蔵庫」で収蔵展示されている。また、国指定申請のために行われた膨大な整理作業の結果は、『徳山の山村生活用具—概説・目録編』『徳山の山村生活用具—実測図編—』の二冊にまとめ

られ、頒布されている。

「民具の名称だけが独り歩きするのではなく、どんな民具なのか実際に現地へ出向いて見ることができる」「名称比較のための一覧表が作りやすい」「山樵・木地屋・紙漉・農耕・手仕事・狩猟・自然採取・衣生活などに関する用具が、質量ともに充実して収集・整理されている (文化庁「国指定文化財等データベース」詳細解説より)」という特徴から、この「徳山の民具」コレクションを、今回のプロジェクトの調査対象の一つとして取り上げさせていただくことになった。

まず、上記二冊の報告書をもとに一覧表を作成したのち、2011 年 10 月に本プロジェクトメンバー一同で「徳山民俗資料収蔵庫」を訪問し、指定当時に、6,000 点近い資料整理の陣頭指揮をとられた民俗研究者、脇田雅彦・節子夫妻から直接お話を伺うことができた。

脇田夫妻には、その後も本プロジェクトにご協力くださるというお言葉をいただき、報告書のまとめの際に、ご寄稿を賜ることを願っていたが、2013 年秋、脇田雅彦氏は急逝されてしまった。今回のプロジェクトにとって大きな痛手であったが、それ以上に我が国の民具研究において、氏を失ったことがどれほど大きなことかを痛感させられた。しかし、「徳山の民具リスト」の掲載は予定通り進めることができ、節子夫人のご好意で、過去に発表された氏原稿を再録することのお許しを得た。以下、「徳山の民具」の特徴については、「徳山村の民具——その語るもののいくつか」(『民具マンスリー』1988 年 5 月、神奈川大学日本常民文化研究所) の全文を、岐阜県全般に視点を移した名称の特徴については、「地域と民具—岐阜県の運搬具示中心に (一)」(『民具マンスリー』1983 年 4 月、神奈川大学日本常民文化研究所) から、一部を抜粋して、ご紹介させていただく。(神野善治)

徳山村の民具——その語るもののいくつか

脇田雅彦

1) はじめに

徳山村の生活の特色とは問われたとき、私は、迷わずに、自然植物との関わりの深さを申し上げることにしている。これは日本の風土をみても、村の位置からしても、至極当然のことで、今更いうまでもないことです。

この徳山村を語るためには、現在、二つの方法があると思

っている。一つは、全村水没といういまわしい悲しい運命を負わされた——その過程を対象にするものと、それらとは全く無縁に従来とられてきたままの方法でみてゆくものである。前者については、既に移転先にまでさまざまな分野からの追究がなされている由を聞き及び、その成果を期待しているところです。私自身も、そんな渦中を垣間みた故に、村人の辿った心の推移を、さらには、行政と村人との関連におい

てまでも考察されることを望んでいます。これを進めてゆくことが、私をも含めての平野部人間に、真の意味でのダムの重さを理解させる一助となると信じるからです。

ここでは後者の立場をとりながら、民具に焦点をあて、自然植物と村人の結びつきがどのようであったかを、気がつくままに列記しつつ、徳山村の紹介をしたいと思います。

(一)

村に入って、最初に感じたことは、「村が生きている」という事実でした。御多分に洩れず過疎化の波は、この村を例外とはしてくれませんでした。にも拘わらず、「村が生きている」のです。その証しは、春秋に典型的に現れます。春の山草とりと、秋の木の実ひろい、茸とり、そして、そのために利用される民具達の姿がそれです。軒先には、真新しいガマのテンゴヤタス（背負袋）、セナカミノなどが、クビカケ（背負縄）類とともに出番を待っています。しかも、昭和初年代生れの方々でさえ、それら民具を作られる伝承者なのです。

ということは、これらを使いこなさねばならぬ条件、つまり、今できのものでは役立たない地理的環境を暗示してくれるわけでもあります。徳山村の一面は、ここにあるともいえます。

半年を雪の中に埋もれてしまう生活を、知らないことには分り難い山草の緑の位置の高さは、これら民具の活躍を裏づける意味あいをも含んでいます。伝統的な食生活の味覚は、調味料に変化をもたらしたものの、基本的には受け継がれ、それ故に山草とりばかりか移転地先でのアザミ栽培にまでつながっているのです。秋になれば、もう一つの大きなうねりとなって、トチノミヤクリ、各種の茸に広がります。陽溜りに干されたムシロの上のトチノミ、そのコザワシ加工の用具など、……六一年、最後に残った家々でも、村の秋は確かに生きていたのです。

いや、徳山村としての終焉の姿を、静かにみせてくれました。

(二)

植物の食習はともかく、これらの自然植物と村人とのつながりは、菌類から草本、そして木本にまで至っている。

菌類では、稲穂についたカビを、コウジとして利用した伝承をもっているが、何といてもこの種の代表はホクチキノコ（シロカイメンタケ？）です。大切な発火具のホクチとして、村内ばかりでなく県内でも広く利用されています。

草本で忘れてならないのは、衣料の素材としてのイラクサです。現古来の時点でも、麻対イラクサの比率は地区によっては五分、もしくはイラクサ優位でした。家回りの限られた上畑を、麻で埋めるわけにはいかない厳しい条件が、ここに潜んでいます⁽¹⁾。不足すれば、ヤマソ（カラムシ）にまで手を伸ばします。麻を重視しないそれは、生産にいくらかの違いをみせるはずで、それどころか、この採取には他集落のものへの進入をさらう一面にまで展開しています。その利用は

単に衣料のみではなく、民具のアミソ（編み糸）から紐、そして各種の縄の補強材になくはならぬからです。

ミチシタ（ミチシバ）はビク（腰用）などの袋物から、履物に、少ないガマは他いきのテンゴ（背負袋）やハバキの素材として、山を越えた坂内村から購入しています。その他、屋根材や雪垣のカヤ、ユルエ（イロリ）のアマにはヨモギ（サナ材）など拾いだしたら際限がないほどです。

(三)

これら以上に、さらに、密接だったのが木本類でした。その中でも、樹木そのままとしての利用で最たるものは段木です。段木が、現金収入の手段として登場するのは江戸期来のことで、農業生産物の乏しい村では、それが租税の代役もかねていた。段木の出荷は昭和七年まで、クダナガシの伝統でひきつがれたが発電所の建設により消えていった。その代わりに、製炭が普及しかけていたが、これより早く登場していたのがトチイタ挽きである。この二つが生業に占めた位置は極めて高く、村の近代化はこれらによって基礎を築き固めたといってもよいだろう。そのために、交通網の展開は欠かせないものだった。眠っていた無限に近い資源は、それに負うて初めて付加価値を高めてくれたのである。

トチノキは、村人にその食習からしてトチ山制度を設けさせ、大切に扱われてきた。その一方で、食用具としての各種の木地物を始め、調整具のキネ、保管具のヌキドウ（桶状にほりぬいた容器）、加工具のキリバン（組）に、農耕具ではツチブネ、クラ、紙漉用具のタネイタ、ハリイタ、養蚕具のクワキリバン、手加工具のヨコヅチ、紡織具のオタクリイタなど、巾広く生活を支えてくれたのには驚かされる。このことだけでも、トチノキは貴いのに、粥や餅、さらにコザワシでの多彩な調理など、民具や食習にまつわる話題は尽きない。

ブナ帯の進出がいちじるしい植生下では、カシの木は北限がぎりぎり一杯になってしまいます。固い木の代役には、ケヤキ、ナラ、クルミ、クリ、それにミズメ達が、柔かい方ではキリがよく使用され、登場する樹種は多様である。

それらが、巧みに使い分けられるのは山間部となればどこでも共通したことである。しかし、これ又昭和一桁代をも含め二桁生まれの村人にまでその伝承の及ぶことは注目すべきであろう。

木本類は、こうして挽きだされ切りだされて民具の素材として適所に使われるが、この他に、剥りものと剥ぎものとしての利用もみられる。

剥りものの典型が先記した穀物を保管するヌキドウ、ニガリをとるためのシオブネ、油絞りの用具（クサビ方式）、それにハチものなどである。これらには、桶以前、陶器のカメやハチ以前の姿、そして、テンピン式になるまでに購入段階に入っていた油類の経過さえもうかがえる。

剥ぎものというと、クリ材が主屋の屋根に使われたのは遅く、大正期まで待たねばなりません。この仲間といえるかどうか、カエデ類やナラ類を利用するネギ細工がある⁽²⁾。こ

れは私のもっとも好きな徳山村の民具で、素材を薄く剥いで組んだ籠類をさしている。この素材には、御承知のマタタビ、村人はコツラと通称するそれも加わっている。

竹類はササダケを含めてないではないが、何故に、木の方が長く利用され続けてきたものか、竹細工ものの購入は、シヨオケ類をのぞいては意外に遅く、こんなことにも村を語る何かがひそんでいるようにみえる。

カエデで裁縫用具入れのハリカゴ、そしてオウミカゴなどは、ナタとキリダシのみがなしたにしてはあまりにも美しく、私を魅了してやまない。この技法は、道場での説教あとの賽銭集めのカゴにまで利用される。小さめの籠はナラ材が多くなり、何かと身の回りの小物類、それに食物を盛り分けるいれものにもなった。フongoと呼ぶ大きなナラで籠は、家人のいない軒先に無雑作におかれ、その健在ぶりはみる度に嬉しかったものである。里芋をいれて流れにもってゆき、片足を踏みこんでその皮をむいたり、洗いものに便利な籠で、如何にも粗々しい大作りの姿は、ハリカゴと対比的で面白い。ナラ材の丈夫さは運搬具にも重宝され、コシヅケ類から背負いのコザにまで至る。コザは桑葉の籠としたり、越前や近江へのマユボッカにも利用された。

自然のしからしめる素材のちがいは、こうしたところで実に鮮やかに教えられるが、同時に、ハリカゴやオウミカゴがそれぞれ、針箱や曲物に推移していった足跡をもみせてくれた。加えて、村人のこれらの作品が、現代にも通じる美であること……ひいきめなのかもしれませんが、美濃の一隅から職人芸をもあわせ現代芸術のあり方にも警鐘を発しているように思えてなりません。

それはともかく、木本類の利用は単に木質部にとどまるものでは決してなく、樹皮や鞣皮部にも注目せねばならない。樹皮の利用には、ケヤキ、シナノキ、カンバの仲間がある。

ケヤキの皮は、小さくとればナベシキに、大きくとったものにはアブリコがある。アブリコは直径が二・九尺ほど、高さは一・五尺ぐらいの円筒型で、ユルエの上につるしてアワやヒエの穂を乾燥するのに使い、サナにはアサガラやマダケを渡す。収穫時には、北陸型の気候になってしまう地域の特色が、こうした民具に影を落としていることになる。大きな乾燥機のガワとしての応用は、曲物のゆきとどきかねた昔、セイロのガワの機能をも果し、ムシオケ以前の古型をとどめてもいます。

さらにはシナノキの皮も、アブリコ用にもみられるのです。

カンバの皮は、かつての越前への交易品になるとともに、テngo(背負袋)の素材にもなって渋い輝きをみせてくれる。これも又、オボケの代役としてガワになり、底はハリボンボ式に和紙とシブで構成する。

付け加えておきたいものに、ブナの皮がある。ワサビの根の食習が、古い時代からのものと分り始めた矢先に、ブナの皮の裏側は乾燥しさえすれば、オロシの機能になることを教わった。陶器のオロシですら古い歴史をもっているのに、どちらが先に発生したものだろう。この巧みなモノを読む眼

……。ブナ帯が、村の北部にまで降りてきている意味がこんなところにもあった。

鞣皮部の利用には、御周知のカミノキ(コウゾ)、ミツマタがある。限られた現金収入の一部を担うからには、有利な冬期の副業として全戸で漉いていたと思いきや、フネのない人は、自家用分だけを漉くために借りねばならなかった。

道具の貸し借りはフネだけにとどまらず、あらゆる用具がその対象とされていた。ウスクリなどの削りもの用具は、もち回りのような性格だった。経済的に大きな差の少ないといわれてきたこの村では、家族数の多少のみが生活にひずみをもたらしていたのである。

紙の中でも、ゴミ(チリ)まで漉きこんだシブガミ(樹皮も入る)は、破れた籠にはり重ね、先記したハリボンボといわれる一閑張りに生れ変っている。

シナノキの活用も周知の如くで、その材はケヤキ同様に諸所にみることができる。しかし、村内ではフジと並んで、衣料の素材としての伝承は聞かれない。県内では、イラクサの分布がある地方でのフジの利用度は極めて低く、問題にされない傾向がうかがえる。こんな理由を明らかにしておく中に、先人の効率化への要求が読みとれるだろう。

その他、例のホクチの代用にはキリやエノキも使われる。後者のエノキは、ウトロ(空洞)になった巨樹の内部のカス状になった部分を取り、桐と同じで炭化して利用した。トチノキのウトロのそれなどは、トチノミのアク抜きに最適のものである。灰にまで生きていたトチノキの姿は、ケヤキ材の灰の珍重さにも延長される。このように、木本類は、燃焼して灰になっても尚、村人とのかかわり続ける。

簡略だが、こんなことで村人と自然植物の間のいくらかは例示し得たと思います。民具をみて、その民具からおかれた環境と生活を理解し、一方で民俗的な古型を模索し続け、生きざまの変遷を明らかにすることも大切なことではなからうか。村人の小さな努力が変遷を生み、それが幾重にも層をなしてきたことで、表むきの歴史が成り立つことは、民俗的な作業でこそ浮きぼりにし得るものと思う。

(四)

次には、それら用具を作りだすための道具の推移にも触れておきたい。目立たないことだが、新しい道具の普及は、それなりに旧来からの民具に強い影響を与えずにはおかなかったのである。そして、そこにも創意が育まれてくるのだった。

その前に、職人衆の製作したものにも地方差がみられるので、その一、二をみておくことにする。

伐採用のヨキには、土佐ものがかなり導入されているが、使いこんだ後の補修は、村人にあう型、大げさにいえば刃部が「く」の字になるように地元の鍛冶職の手で整形されてしまう。

カラつきの鋏には越前、美濃の両型式があり、前者は木部が薄く、東谷といわれる塚、栢原地区に分布する。後者は木

部が厚く、東谷を除く他地区で利用される。東谷での交易は、地理的にも、かつては越前を優位としていた。

ヨキの例では、同樹種でも材質が土佐地方の暖国とではことなるのか、それとも対象樹種によるものか、クワガラの場合では、耕土の性質か、或は、耕起する場所なのだろうか。

いずれにしても、それらは狭い地域での使い易さの結果であるのに他ならない。つまり、村人は道具を、旨く適合させ自分達の手足にしてしまうことを意味している。

道具の推移をみることは、こうした延長線上にあるといってもよいだろう。再びヨキに戻るが、かつて、伐採に使った用具はヨキ単独で鋸の利用は、まず、望めることではなかった。ここ徳山村も同じで、少なくとも現古老の先代の頃、およそ明治期から大正期にかけてでも、ヨキが優先であった。ここへ新規に導入されたのが各種の鋸で、その中に縦挽きのオガがあり、横挽きのガンドがある。

とすれば、江戸期の段木を復原するにあたっては、安易なチェーンソウ挽きは許されるはずがない。ヨキを使ったその切り口は、杭棒の先のようにとぎらせねば正確とはいえない⁽³⁾。鋸の普及は急速で、それら旧態を一掃し、ネギリ自体、細いものはガンドだけ、太い材になってヨキとダイギリ(横挽きの大型)もしくはガンドの二段階の処理となってゆく。トチノキの巨材を挽きだすためには、オガも大切だが、このオガをクビツギ(古くなったオガを鉄材をつけて長くする)する鋸鍛冶の存在も欠かせない。こうして板材を挽きだすために、越前や遠くの村からの木挽職を待たずともよくなる新しい時代が訪れてくる。

八点あるキリバン(組)は、小判型から長方形まで二方式ある中で、古老は前者を古型と教えて下さる。

紙漉工程でのカミタタキは、カミの繊維をこなすための大切な作業である。徳山村の属する揖斐郡は、隣の本巣郡ともども、その用具には円板状の石材が登場する。その石質が、またまた、地区差をもたらし、石を利用することそのものが、後世主産地となった現美濃市地方と対比的になる。この美濃方式が、現古老の頃から滲透をみるようになり、姿勢勢が立姿勢に、ツチもバイ(棒状)の形をとってゆく。

ケヤキ皮のアブリコにも変化があらわれ、板材の柵型になってしまう。仲間だったセイロも、樹皮から桶になっていたのが、枠式のカクセイロに移って、しかも、効率も飛躍した重ね型になる。材の本質を生かすため、割って木取りをされていたテコ(ユキカキ)にも、挽きものがみられるように変る。

この様子を見てみると、家屋内にあった民具のいくつか、オガの出現で丸→角へとその伝統を脱ぎすてたことが分ってくる。めいめいの食事用具をのせていた木地物のゼンまでが、他給品とはいうものの、角型のハコゼンに代り始めていたのもこんなところだった。

家の周りでは、トチイタ材の不良品が、ユキガキを間仕切ってカヤを駆逐し、冬期の景観まで新らたにする。

管見ではあるけれども、職人衆の用具のもたらすもので、

こんな小さな推移がのぞかれる。

(五)

一方で、徳山村には村独自の発想と考えられるものもないのではない。

人力用のマグワはクリ材とイナコキの古刃を素材とし、スキヤミツグワで田起しした後のヘカマ(土塊)を砕くに効果をあげてきた⁽⁴⁾。

キリバンなどは周縁に凹みをいれ回して、水ものの調理の扱いに重宝する。板材の角型に代ると、現在のような肢つきになってくる。

木地職の製品では独自とはいえないが、とりあえず、ここで鼓型のタテマクラをあげておこう。これが枕とは、誰もいいあてられないだけに、興味深いものがある。素材がトチノキを始めとして、ホオノキ、ケヤキからエンジュにまで及び、自作のマクラがヒノキ、スギ、キリなどであるだけにひどく対照的で気にかかる。一体、快い眠りを誘う枕の素材は、何なのだろうか。

籠の仲間をもって独自とするには少し気がかりではあるものの、コツラ素材のアジカにだけは登場してもらわねばなるまい。このアジカは、トチノミのコザワシ工程のアラザワシ用を主目的とし、編み方も複雑だが、その形も美しく手のこんだ作品である。これには、なんと、名手といわれる二、三人のお名前が村人の記憶に残される。明らかに、この人達の手になると思われるものが、南へ下った藤橋村にも来ている。たとえ伝承者がなくとも、その地区でのコザワシの食習の存在は不動となってくる。

数箇の穴をもつ、トチノキやナラできの汁杓子は、ダンゴ類の加工が蒸すのではなくて、茹でるためにこそ欠かせない。ほどよく煮えて、ナベの底から浮いてきたダンゴは、この杓子で熱い湯からとりだすことができる。セイロの古型であるケヤキ皮、それにムシオケの口径が小さいわけである。蒸すことを、拒否してきた条件はどこに求めたらよいのか……。

脚部がないだけのベッド、一ネヤ(箱床)の暖かい間仕切りの空間は、私まで追体験させてもらった。その合理性は強烈な印象となり、いまだに、あのぬくもりと板壁から洩れる陽の光が忘れられない。いや、これだけは東日本に点在したもの故、ここからは省くべきだが、この伝統が一人Kさんにだけ受け継がれたことをもって、あえて創造とみてあげたい。死ぬまでは、ここで安らぎたかったろうKさんとネヤの惜別は、あまりにもむごかった⁽⁵⁾。

(六)

こうした徳山村をもって、陸の孤島とする表現には、いつも、私は抵抗をすることだった。実際に、村は隔絶した中で生活していたわけでは決してない。村内の各地区では、それぞれが、越前や近江や美濃と密接なつながりをもっていたのである。方言学からみると、村内はそれら三つの地方の影響

すらみられるという。こんなにも、各地の文化を一村に吸収している例があるだろうか。孤島という用語は冬期の交通手段が、困苦を極めるときにだけ利用したいものである。

ところが、民具はとなると、これが少し混乱してくる。というのは、自給民具からすれば徳山式であり、それは、美濃式に延長されてゆく。しかし、職人衆のものともなると、美濃式でない地区が現れてくるのだ。

前者では、ミノ類が顕著になり、それはテンゴの紐配りにもみえてくる。後者には、山一つ越えただけの越前鎌がありシタガリガマなどは土佐物になる。石の挽き臼は、越前臼と美濃臼の両者が混交し、その素材と曳き手には、それぞれの特徴がうかがえる。県西部は、ヒエを粉食するのがふつうで、山小屋と二重生活をしてきたこの村では、挽き臼も重複して所有する。農具までもが、これに習わねばならなかった。話がそれてしまったが、カマ類は完全に他国のものになり、先に記した越前のヒツグワは、美濃式地区と対峙する。自給民具の例外に、長床式のスキを記しておかねばなるまい。一名がゴウシュウズキで近江の型を真似たという。

オガに必要なハヤキの加工になると、直線距離にして三五キロメートル離れた美山町が、新しくゆききの対象となる。そこの鍛冶職の出身を問うと、美濃の北端白鳥町の名が浮かんでくる。古い時代に、木挽職はどんなルートを辿って手入れをしたものだろう。

村内に自生しないカシを利用した農具は、こんな時代からの、活達なゆききを物語ってさえいるではないか。

2) むすびにかえて

徳山村の民具達は、このように、いろいろ語りかけてくれましたが、至らぬ私故に、その中のどれだけを咀嚼しきれたかと不安に駆られるばかりです。これからも機会ある毎に、村を離れて周辺町村の聞き書きを増やすことで、少しでも、その溝を埋めたいと考えております。

終りにあたり、もう一つ記しておくことを御許し願いたいと思います。それは、村人が作ったものにせよ、村内の職人衆の製品にせよ、これらの民具がすべて大っぶりであるということです。前者はムシロバタゴ、ヘダイ⁽⁶⁾、先にてたシオブネや削ったハチ類で、後者はオケ(豆腐用)をみて頂けばこと足ります。平野部のひよわさに比べたら、なんと伸びやかで、堂々と、胸をはっていることか。ムシロバタゴのコーナーなどは、齢を重ねた素材にこそ秘められる威圧感さえ受けるのです。それもそのはず、太い材を得るためには、その数倍の木を利用せねばなりません。

ハチ類の直径からしても、とり組んだ木の大きさがうかがえます。このとき、ヨキのみの時代には、必要な分だけを、実は立木からくりぬいていたのです。

これらと反対に位置するのがオウミカゴで、これは気配りのゆきとどいた繊細な組みものです。そのために、素性のよい材質を選ばねばならず、みつからないと一日中でも、木を伐り倒して歩き回ったともいわれます。

みるもの、ふれるものをして、民具を超える何かを印象づけられないでおかぬ所以は、その木取りにもあったようです。それは、木の過ごしてきた年輪のもたらす齢の重さでもあるのでしよう。

こんなぜいたくなことが許される、当たり前とされる背景はなんだったのでしょうか。いうまでもない、豊かな緑の存在です。それも、単なる緑ではなく、陽の光も地面にとどきかねる樹林、つまり、過去を復原すれば、徳山村は原生林に囲まれ、いやそうではなく包まれていました。ひとり、ここ徳山村だけではなく、日本中が、これだったはずです。

トチノキなどは、大切なトチノミを採集するためのトチ山を別にしても、木地職を受けいれる余地はいくらかありました。それが、まだ残っていたからこそ、トチイタも挽けたのでした。

それほど林相故、製炭にもなんの不自由はなかったのです。そればかりか、無限に近い緑の資源は、荒廃しきった戦後の国土の立ち直りにまで、大きく貢献してくれました。

現在、原生林はほんの一部に残されるだけで、巨木もどれほどもないといわれます。

徳山村の民具は、こうして、私達に緑のない—今—を気づかせてくれます。人間が住むため欠かせない緑なのに、爆発的に増えゆく人口を支えるとして、緑の均衡は開発という名を借りてどんどん悪化するばかりです。私達は緑の美しさを、先人の伝統とともに次世代に残さねばいけないはず。開発した分だけは、少なくとも、どこかでとり戻す配慮をせねばならぬと思います。

村の長い歴史は、実に、緑があつてこそ支えられてきたのでした。その証しの一つを、民具達が語ってくれたのです。

民具は、ただ、民俗の分野にだけとどまる小さなものではない。私達が早くに忘れてしまった、いや、失ってしまった日本の美しさを教えてくれるとともに、今、どうするかをも強烈に問いかけているのではないのでしょうか。

やがて水底に消えてしまう村の残せた民具は、僅か壺萬二千点ほどに過ぎません。しかし、二度とは蒐められないだけに、貴いものばかりです。こんな切ない状況下故、村の伝統のこもる民具が⁽⁷⁾、先人の労苦への顕彰や墓標、そして頂いた方達への記念としてだけにあることがしのび難くて、思わぬ方向へ筆が走ってしまいました。「村のことを……」と編集部から絶好の機会を与えられながら趣旨をまげ、責をも果し得ず申し訳ありません。無作法は御許し下さって、私の読んだりぬことごとへの御示唆をたまわりますように御願ひするものです。

注(1) 拙稿「徳山村の民具蒐集で気づいたこと」東海民具7

拙稿「岐阜県内の衣料素材 徳山村を中心に」徳山村・その自然と歴史と文化(2)

(2) 拙稿「徳山より・研究メモ」東海民具8

- (3) 段木の展示に際し、高橋俊示先生より、間違いの御指摘と御教導を賜りましたことを記して感謝申し上げる次第です。
- (4) 拙稿「美濃・徳山村の人力用マグワ」民具研究 64
- (5) 脇田節子「ネヤ」東海民具 9
- (6) 国指定の作業中には、紡織用具のいくつかに関し、角山幸洋先生の御懇切なる御指導を頂戴しました。ここに記して、御礼に替えさせていただきます。
- (7) 伝統といえば、真宗門徒の行事の一つ、御講に利用するオコピツ（食事用具）に天明年間の記年銘があり、この分野に関して貴重な存在になるだろう。

3) 追記

幸いにも、徳山村の民具は、閉村の瀬戸際でしたが、その

中の五千八百余点に国指定の重みを受けることができました。

これも、ひとえに木下先生の人的手配などから始まった村への格別な御心配り、そして、峻烈なる御指導のたまもの故と、ちょうど一年前をふり返ってしみじみ思うことです。

測図などの作業では、竹中順子、野上彰子、両嬢を指導者に紹介頂き、そのもとで多勢の人達がすばらしい実測図とスケッチを消えてゆく村に残してくれました。殊に竹中嬢には最後まで無理を御願ひし、その結果が二冊の報告書の形で世に問えることになりました。

それらについては、木下先生からの御紹介を頂くことにします。

なお、原文には参照用の画像が入っていたが、今回は省略した。

地域と民具——岐阜県の運搬具示中心に

脇田雅彦

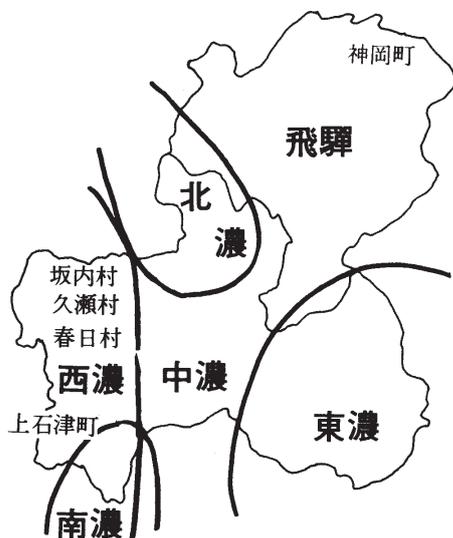
1) はじめに

岐阜県は、美濃、飛驒両国からなっており、美濃地方は更に、東濃、中濃、西濃、そして北濃、南濃の五地域に呼称される。美濃の区分は、明確にこれと規定するのではなく、多少の柔軟性をもっている（図1）。

この県内を方言区割で位置づけると、東西線では東濃（県境周辺では愛知県要素）と、西濃（県境周辺で滋賀県要素）に区分され、南北線では、飛驒、美濃北部、南部となる。更に細分化した場合、美濃はやはり略先記の五地域になるという。そしてその間には、緩衝地帯的なものがあることが指摘されている⁽¹⁾。

本稿では、県内の運搬習俗中、背負い、肩担い、腰づけなどの民具を分析して、その区分との関連や地域史への位置づけを試みたい。

図1



2) 地域と民具の名称

最初に、広大な県内の傾向を知るために、民具の名称から取り上げることにする。

取り扱った民具は、二四点、参考に薪物を一点加えた二五点で、その名称分布図が（図2-①～③）である。その中、運搬用具は十三点、その他十一点の構成で、笠、鉈、桶を除いて全部自給されるものを選んだ。（但し、クサカリカゴは、その性格が流動的である）。自給用具を主としたのは、そうしたもののこそ地域の古い伝統を継承し、近代の影響を受けていないと考えるからである。

名称分布図中、印が並列もしくは二段になっているものは、その地区での併称を意味している。そして、先述の地域区分にはほぼ適合して同一呼称の分布するものには、大略ではあるが線で表示した。

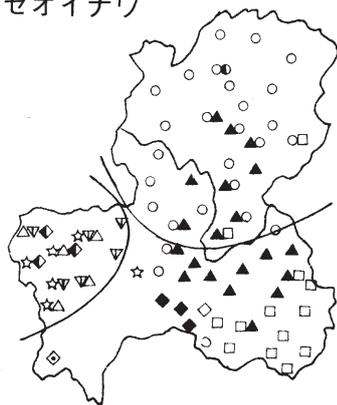
これらの図によれば、マヤ肥用セオイイタ、コモ、ネコダなどのように明確な偏在を示すものもあり、一方ではセナカミノのようにその特色の分り難いこともある。更には、ニナイボーやオサのように、それが現われない民具もでてくる。比較に加えた購入用具の笠、鉈などにも、偏りができるのは興味深い。

全般をみた場合、やはり美濃と飛驒に大別され得ることは、容易に肯かれる。殊に明瞭なのは、ユキグツ、クサカリカゴ、ミノなどである。美濃地方では、セオイブクロで東濃、セオイイタで西濃、コモで北濃、ニナイボー（サス方式）では南濃などが、それぞれの地域の特質を示している。こうした中で、中濃のみが、その性格を不鮮明にする。

それらの頻度を簡潔にしたのが（表1）である。表には、多少の出入りはあるが、一応顕著に共通名称をもち、（図1）の地域区分をほぼ満足すると思われるものに○を、やや広域に分布するものには□で表示し、各々の頻度を下段に記した（図3参照）。

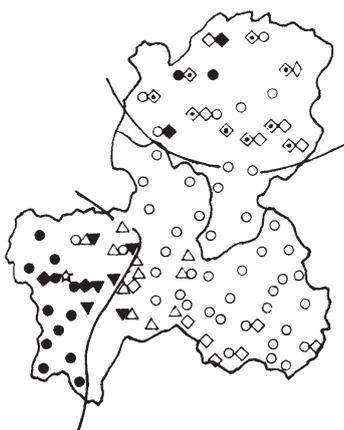
図2-①

セオイナワ



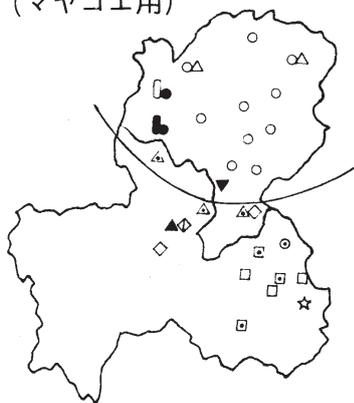
- | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|------|
| ○ | ニナワ | △ | クミナワ | ◇ | オネナワ |
| ● | クミノナワ | ▲ | イナワ | ◆ | オネナワ |
| □ | シイナワ | ▽ | クビナワ | ◇ | オネ |
| ☆ | サカイ | ▽ | クビカゲ | ◇ | オイナワ |
| ☆ | サカイ | | | | |

セオイイタ



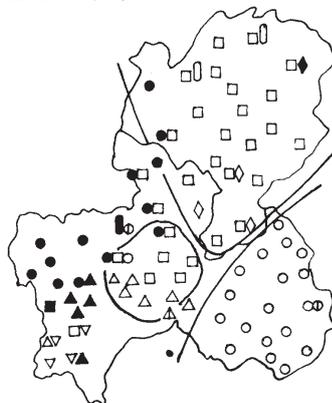
- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-----|
| ○ | セイタ | △ | オネコ | ◇ | シイコ |
| ● | セタ | ▲ | オネ | ◆ | シイタ |
| ☆ | マタセタ | ▽ | ペンゴジ | ◇ | セイコ |
| ☆ | コホセタ | ◇ | セナコケ | | |

セオイイタ
(マヤゴエ用)



- | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|------|
| ○ | コエモナ | ▽ | コエシセタ | ☆ | イタセタ |
| △ | コエモセタ | □ | コエシ | ◆ | コエタナ |
| ▲ | コエモネ | ◇ | コエシセタ | ◆ | コエタナ |
| ▲ | コエモセタ | ◇ | マヤゴエ | ◆ | エビス |
| ▲ | コエモセタ | ◇ | コエシセタ | ● | オイ |

セオイブクロ



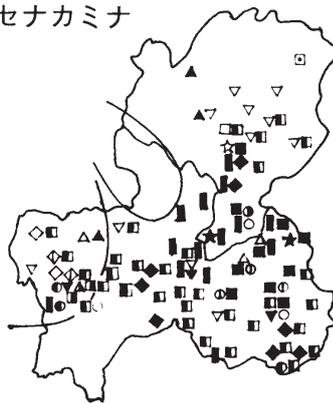
- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|
| ○ | セオセゴ | ▽ | タス | ◇ | イギミ |
| ● | チゴチゴ | □ | ネコネコ | ◆ | シトダ |
| △ | バトセゴ | ◇ | 770ミ | ◆ | タケノ |
| ▲ | マタセゴ | ◇ | セナコ | ◆ | オネセク |
| | | | | ○ | その他 |

クサカリカゴ



- | | | | | | |
|---|--------|---|------|---|------|
| ○ | クサカリカゴ | ▽ | メコガ | ◆ | シイカゴ |
| ● | クサカリカゴ | ◆ | オネカゴ | ◆ | オネカゴ |
| △ | メカゴ | ◇ | サカゴ | ◆ | その他 |

セナカミナ



- | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|------|
| □ | セナガミ | ◆ | セミノ | ☆ | オネミノ |
| ■ | セガミ | ◇ | セナカアテ | ☆ | イタミノ |
| ■ | セガミ | ▽ | ミノ | ○ | ナツミノ |
| ■ | セガミ | ▽ | コミノ | ○ | ヒツミノ |
| ■ | セガミ | ▽ | アチミノ | ○ | ヒヨミノ |
| ■ | セガミ | ▲ | タミノ | ○ | ヒオミノ |
| ■ | セガミ | ▲ | カミノ | ○ | キタミノ |
| ■ | セガミ | ▲ | カタミノ | ○ | シイミノ |

セナカアテ
(コモ類)



- | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|-------|
| ○ | コモ | ○ | オノコモ | ◇ | テンギミノ |
| ● | セガミ | □ | ムカセ | ◇ | ヒヨリミノ |
| ○ | ムカセ | □ | サルミノ | ◇ | ヒツリミノ |
| ○ | オリコモ | □ | タミノ | ◇ | ビツリ |
| ○ | ケゴモ | □ | タタキミノ | ☆ | ミノゴ |
| ○ | ヒツリ | □ | ヒガミ | △ | ニノモ |
| ○ | ヒツリ | □ | カタミノ | | |

セナカアテ
(ネコダ系)



- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|
| ◇ | マタプレ | △ | ネコダ | ☆ | ネコガエ |
| □ | ゴロダ | ▲ | マタゴダ | ○ | 名称不明 |

図2-②

ニナイボー
(ビク・桶用)



- コエイボー
- イナイボー
- △ ニナイボー
- ▲ テルンボー
- ▲ コエボー
- ★ コエモサボー
- ▼ カサネボー
- ▼ カタネボー
- ▼ ボー
- ▼ シノフボー
- シンパボー
- ナカトリ
- サルボー
- ◇ シクイボー
- ◇ オコボー

ニナイボウ
(サス方式)



- イナイボー
- カサネボー
- △ ボー
- ▲ ヤマボー
- オコボー
- タキギボー
- トギリボー
- タケボー

コエオケ



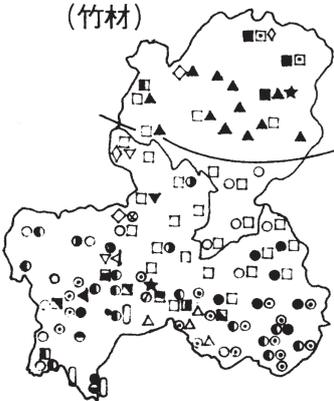
- タゴケ
- タカタケ
- シンバキ
- シンバケ
- △ コエタンゴ
- △ コエタゴ
- △ コエタガ
- ▲ ニナイダレ
- ▲ シンバシ
- ▲ ツノオケ
- ▲ ツナオケ
- ▲ コエオケ
- ▲ コヤシオケ
- ▲ シモオケ
- ☆ カツネオケ
- ☆ ケスオケ
- ☆ ガラオケ
- ☆ アリオケ
- ☆ ニナイオケ
- ☆ イナイオケ
- ☆ シンパオケ
- ☆ シンハオケ

コシカゴ
(竹製を除く)



- ビク
- コシビク
- ツカビク
- ナビク
- ワラビク
- イナゴ
- ユンゴ
- フダゴ
- △ テゴ
- ▲ テンゴ
- ▲ ドワテンゴ
- 名称不明

コシカゴ
(竹材)



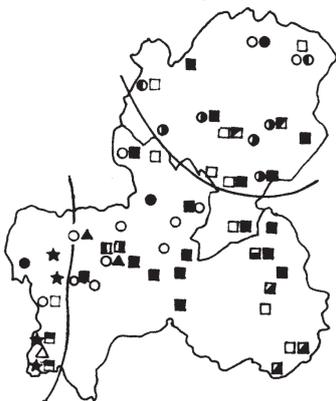
- カゴ
- メカゴ
- コシカゴ
- コシカゴ
- イモカゴ
- クワカゴ
- クワシカゴ
- ボツカゴ
- トツカゴ
- ビク
- ヒゴ
- フゴ
- フンゴ
- ハンゴ
- コツアゴ
- イットゴ
- コフゴ
- トフゴ
- コシゴ
- ホヒロイ
- △ テンバツ
- ▲ アケカ
- ▲ ノキナシ
- ▲ ユキナシ
- ▲ テゴテンゴ
- ▲ ドワテンゴ
- ▲ コシバケ
- ▲ タナマキ
- ▲ クサヒロイ

ミノ



- バンドリ
- イバドリ
- コシバドリ
- トロバドリ
- 矢イキ
- カンゴ
- ドーマル
- オーミン
- ドーミン
- ミニ
- トビミン
- ツバタ
- ▽ ホーバノ
- ▽ オタミノ
- ▽ ヨロミノ
- ▽ ソチミノ
- ▽ ヒカガ
- ▽ マルミノ
- ▽ ヒラミノ

ミ (炭焼き用など)



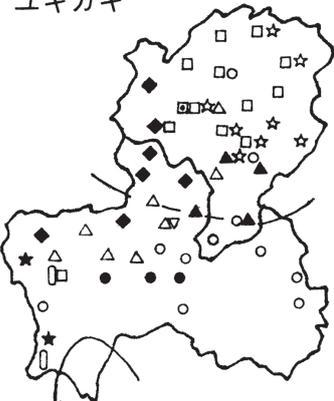
- メカイ
- メックイ
- ミカイ
- ミツカイ
- スドリ
- ミケ
- タツケ
- ササ
- マノ
- イシ
- スナ
- スミ
- ソリ
- ササ
- ミス
- ショ
- ヌ

ユキグツ
(筒形のみ)



- ユキグツ
- フラグツ
- フラグツ
- △ ズンバ
- ▲ スンバ
- ▲ ズバ
- ▲ ズバ
- ★ ズバ
- ★ ゴン
- ズバ
- ツ

ユキカキ

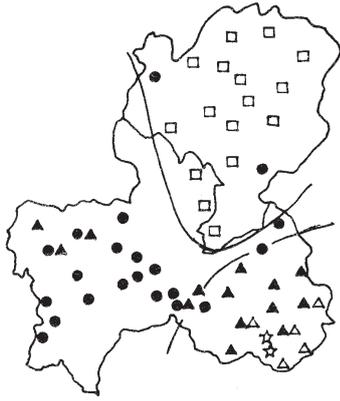


- ユキカキ
- ユキヨケ
- ユキヨケ
- △ ユキスキ
- ▲ ユキスキ
- ▲ ユキスキ
- ▲ ユキスキ
- ▽ テンジョ
- ▽ バンバ
- ▽ ユキバ
- ▽ ユキセバ
- ▽ テ
- ▽ テ
- ☆ コク

徳山・解説

図2-3

ウラウチイシ



- △ タタキイシ □ (ダ)ーバ ☆ フラフクイシ
▲ フラフクイシ ● フラフクイシ

モジリ編用のオモリ



- ヴァロ、ツツラ ▼ デッチ ● コモイシ
● コモツツロ ● ツチ、コツチ ○ コモツリコ
● コモツツラ ● コモツツチ ○ カリコ、カリカ
● ツチコ、ツチロ □ コ、テ ○ スノコ
● ヴァロ、コ、カ □ コモツツチ ○ タタラ
● ツチロ、コ、カ ● コモツツチ ☆ ハチンボ
● ツチロ、コ、カ □ ナルコ ● ハチンボ
△ トチラコ ● ロクコ ● ハチンボ
● トチラコ ● コロ、コロソ ☆ ハチンボ
▲ デシ、モデシ ● コ、マ ● ハチンボ

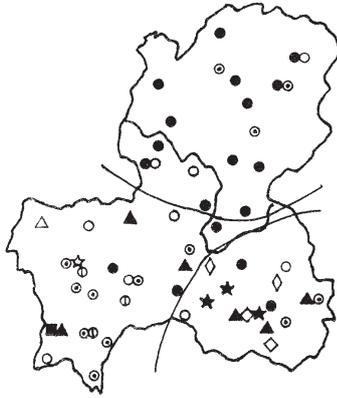
カビ



- ドビ、ドビ ▼ フトスバ ☆ カダイ
● ヒナフ ● フトダイ ☆ ウマシ
◇ カバ ● フトダイ ☆ フトヤシ
◇ カバ ● カアサ ● イブシ、カブシ
△ カブ ○ ヒノド ● カイシ

ヒ

(ムシロハタゴ用)



- イサシ △ エ(イ) ◇ (ハリ)ムシロバリ
● エサシ ● ▲ ヒ ● (ムシロバリ)
○ サシ ☆ コバシ ● ヤシバエ
○ サス ● カギ ◇ オトシ

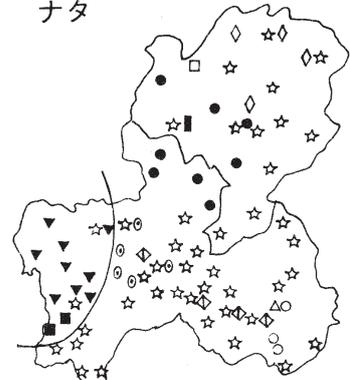
オサ

(ムシロハタゴ用)



- コテ ● オサ

ナタ



- トビナシ ▼ サキナタ ■ ケンナタ
● ホイチョ □ ホエツチ ナタ
△ トナツナタ ● エダツチ ○ ヒラナタ
◇ ハシナシ ◇ その他

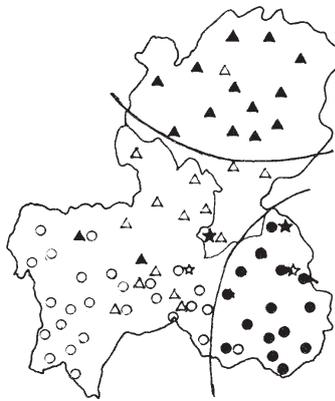
カサ



- △ ヒキガサ ☆ ロツボ □ カサ
◇ ヒキタマ ● イタガサ □ テガサ
◇ ウシクビ ● イタミガサ □ ヒガサ
◆ フカゼ ● イタミガサ □ サバガサ
● カバガサ

タキモノ

(先の方の細枝)



- シバ △ アエ ☆ ボヤ
● モヤ ▲ ホエ

その結果、飛騨地方を明示する民具が十四点で、資料二四点の半数以上をしめ、美濃地方では西濃地域が十点を表示して、その地域を浮上させているのが理解される。次いで、東濃、北濃の順になるが、中濃は僅か一点でほとんどの場合、西濃、北濃そして東濃の影響を受けてしまう。いわば、周辺地域の緩衝地帯ともいうことができる。

この状態は(表1)の指数にも或る程度うかがわれる。最も他地域と共通要素をもつのが西濃と南濃で、中濃、北濃がそれにつづいている。飛騨が美濃側と四点の連繋しかないことは、美濃と相容れない際立った性格を示して対象的である。美濃地方では東濃にその一面が現われている。いづれにしても、県内を方言上から区分した概念は、民具の側からすると、中濃を除いた他の地域に関してはほぼ適合することが分ってきた。

3) 地域にみる民具の特色

これまでに取り扱った限りではニナイボウとオサを除いて県内に共通性のみられるものはなく、むしろ飛騨、東濃、西濃に分布の偏りのあるものを抽出することができた。次にはこの三地域での民具そのものの特色を、名称を離れて列記してみたい。

- (1) セオイブクロに、縄編み形式がよく利用される。一西・飛・(北)
- (2) セオイブクロ表面の配紐に、装飾性の指向が強い。一西・飛・(北)
- (3) セオイブクロに、極めて大形のものをよく使用する。一西・飛・(北)
- (4) セナカアテに、ネゴダヤコモをあてる。一飛・(北)
- (5) 前記のネゴダヤコモのない地域では、セナカミノが日除要素をなくして、機能がセナカアテに分化する。一西・飛
- (6) 前記(5)に関連して、ネゴ編みのセオイブクロが消滅したと思われる。一西・飛
- (7) セナカアテに、ネゴ編みのセオイブクロを利用する。一東
- (8) セナカミノが、日除に多用される。一東
- (9) 民具のアミノに天然植物繊維を使う例が多い。一西・飛・(北)
- (10) 素材そのものにもよく応用する。一西・飛・(北)
- (11) ユキグツ類を履く。一西・飛・(北)
- (12) ミノの形式が少し異なる。一飛・(北)
- (13) カビの素材に木綿が少ない。一西・飛・(北)

主として、こうした点を上げることができる。この中で、東濃地域の特色は、(7)と(8)にあるのみで、むしろ括弧内に記入した北濃地域の方が、西濃や飛騨によく密接な関連をもっていることが指摘される。名称とそれに絡んだ類似性の類度からは明瞭にし得なかったが、民具そのものの中に県内北部を巡る山間地帯として、何らかの特質の潜んでいるのがそれを検討することで推測できるようである。つまり、飛

騨地方から北濃地域、そして西濃地域へかけては、自然・気候条件もほぼ共通しているからには、他の地域と一線を劃す興味ある問題を提示してくれるのではないだろうか⁽²⁾。

(以下省略)

注(1) 奥村三雄 岐阜県の方言研究

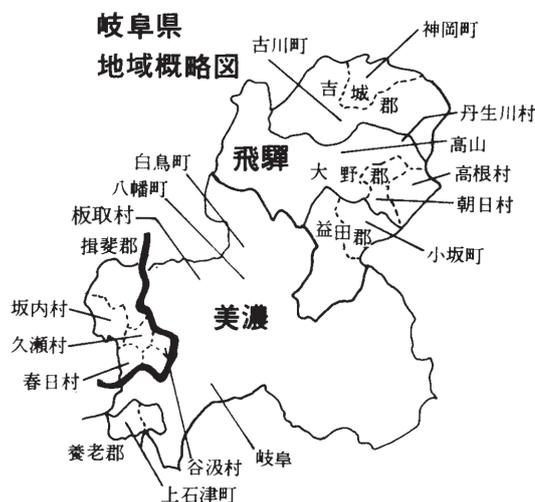
(2) 気象的には、平均気温、根雪期間などほぼこの地帯に共通している。

表 1

民具名称	地方	飛騨	東濃	中濃	北濃	西濃	南濃
セオйнаワ		◎			□	○	
セオイタ		○				◎	□
セオイタ (マヤ肥用)		○		□		□	□
セオイブクロ		○	○	○			
クサカリカゴ		○	□		□	○	
セナカミノ					○	○	
セナカアテ (コモ)		○	□	□	○	□	□
セナカアテ (ネゴダ)			□	□	□	□	□
ニナイボー							
ニナイボー (サス方式)		□			□	□	○
コエオケ		○	□	□	○	○	□
コシカゴ (竹)		○					
コシカゴ (竹以外)			○			○	
ミノ		○				○	
ミ		○				○	
ユキグツ (筒形)		○			○	○	
ユキカキ		○					○
ワラウチシ		○	○	□		□	
オモリ (モザリ編用)			○		□	□	□
カビ		□	○		□	□	
オサ (筵織用)			○				
ヒ (筵織用)		○	○				
ナタ		□	□			○	□
カサ				□	○		□
(タキモノ)		○	○	□		□	□
民具該当総計		14	6	1	5	10	2
広域分布総計		4	5	6	6	8	8

表には、多少の出入りはあるが、一応顕著に共通名称をもち、(図1)の地域区分をほぼ満足すると思われるものに○を、やや広域に分布するものには□で表示し、各々の類度を下段に記した(図3参照)。

図 3



徳山・解説

2. 終わりに

脇田雅彦氏は、「民具に対しても、呼び名一つでも一つのムラで二カ所か三カ所は聞かなくてはならない。そういう姿勢で岐阜県内を飛び歩いたんです」（「座談会 脇田さん、辿ってきた道を語る」『名古屋民俗 56』（2008年11月）より）という。その成果のひとつが、p. 184～p. 186でご紹介した地域と民具の分布図である。

この叢書に記載した「徳山の民具」一覧表は、民具が語るもののほんの一部であり、民具を同定するための手がかりにすぎないが、この表が何らかの形で「徳山民俗資料収蔵庫」へ足を運ぶ機会につながれば幸甚である。脇田氏の以下の言葉をもって、本稿の締めくくりとしたい。（神野善治）

「徳山の道具を見せてもらって、ここで実は大ショッ

クしちゃったんですね。僕はこれまで、飛騨でいろいろ話を聞いた、あるいは美濃の板取の奥とか、あるいは根尾村の奥とか、昔の古い話を聞いてこれは見たいなという道具がいくらか出てきていたんです。それが徳山に行ったら校舎にいっぱい入ってたんです。これにはびっくりしました。（略）そういった我々が手に入らないものが徳山にびっしりあった。しかもそれは古いタイプ、もう一つ前のものだったんですね。ほかの地区ではもういつか絶えちゃって、わずかに1点か2点あるかなしかのものが、徳山には重複してあるんじゃないですか。」

「徳山の人たちから学んだ一番大切なことは、原日本の自然のすごさ、自然の素晴らしさ、そして自然の中で生きる技術ですね。だから徳山を知れば、東北に連なるブナ帯の素晴らしさですね。これが、自ずと分かってきます」（同座談会より）。